

日田市埋蔵文化財調査報告書第53集

# 葛原遺跡 II

—A～E区の調査報告—

2004年

日田市教育委員会

## 序 文

葛原遺跡は市内でも古くから石器が採集される場所として知られてきました遺跡の一つで、遺跡のあります台地には縄文時代から中世にかけての集落や山城などが残っています。

今回報告します内容は、ニッカウキスキー株式会社日田工場建設に先立って発掘調査を行った成果をまとめたものです。

調査では古墳時代の竪穴住居や建物跡などが発見され、このうち竪穴住居跡1軒につきましては、当時のニッカウキスキー株式会社のご協力によって現状保存されました。

その後、この住居は同社の出資によって復元住居として整備され、企業による文化財の活用が図られてきました。

残念ながら平成11年3月には同社日田工場は閉鎖されることになりましたが、本年4月の三和種類いいちこ日田蒸留所のオープンによって、この復元住居は再び一般に公開されることになりました。

こうした遺跡の活用がますます望まれるところであり、また本書がこうした文化財保護や地域の歴史、学術研究等に寄与されれば幸いです。

最後に、発掘調査から整理・報告書作成にいたるまでご指導、ご協力をいただきました土地所有者を始めとします多くの関係者の皆様方に対して心から厚くお礼を申し上げます。

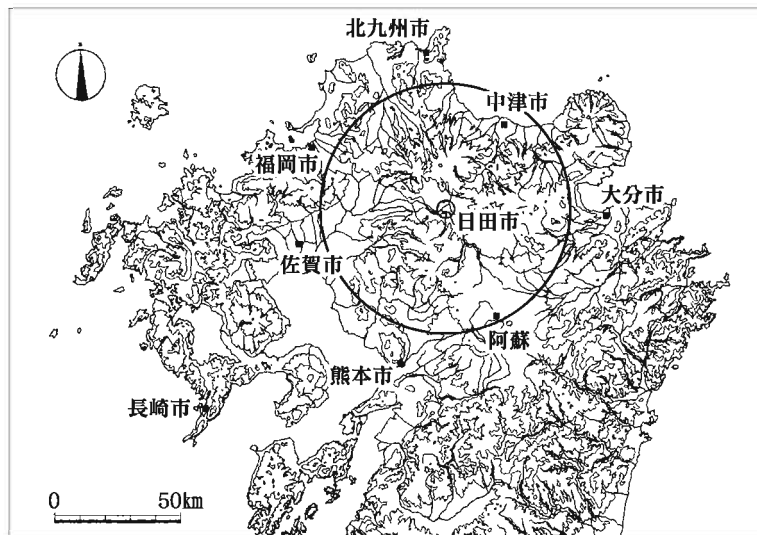
平成16年6月

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄

## 例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が昭和62年度に日田市土地開発公社からの委託を受けて実施した葛原遺跡A～E区の発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては日田市土地開発公社、ニッカウキスキー株式会社、土地所有者のご協力を受けた。
3. 調査現場での実測・写真撮影は土居、友岡が行った。
4. 本書に使用した遺構図の方位は、全て磁北である。
5. 本書に掲載の遺物実測は土居が行い、製図は藤野が行った。
6. また、遺物写真は長谷川正美（雅企画有限会社）氏に撮影委託した成果品を、復元住居の写真はニッカウキスキー株式会社撮影の写真を使用している。
7. 写真図版中の番号は、全て挿図番号と一致する。
8. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
9. 本書の作成にあたっては、下村 智（別府大学）・今田秀樹（天瀬町教育委員会）氏のご指導をいただいた。
10. 本書の執筆・編集は、土居が行なった。
11. 題字は、日田市文化財調査委員の武石邦男氏の渾毫による。



日田市の位置

# 本文目次

I. 調査に至る経過と組織	1
II. 遺跡の立地と環境	3
III. 調査の記録	5
(1) 調査の概要	5
(2) A区の調査	5
(3) B区の調査	8
(4) C区の調査	9
(5) D区の調査	13
(6) E区の調査	18
(7) その他の遺物	21
IV. まとめ	22

# 挿図目次

第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25000)	3
第2図 調査区位置図 (1/5000)	4
第3図 A区遺構配置図 (1/400)	5
第4図 A区土坑実測図① (1/40)	6
第5図 A区土坑実測図② (1/40)	7
第6図 A区土坑・ピット出土遺物実測図 (1/4)	7
第7図 B区遺構配置図 (1/400)	8
第8図 B区土坑実測図① (1/40)	8
第9図 B区土坑実測図② (1/40)	9
第10図 C区遺構配置図 (1/400)	9
第11図 C区1号竪穴住居実測図 (1/60)	11
第12図 C区1号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	11
第13図 C区2号竪穴住居実測図 (1/60)	11
第14図 C区1号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)	12
第15図 C区1号竪穴住居出土石器・鉄器実測図 (1/2)	12

第16図	C区1号掘立柱建物実測図 (1/80)	12
第17図	D-1区遺構配置図 (1/400)	13
第18図	D-2区遺構配置図 (1/400)	13
第19図	D-2区1号竪穴住居実測図 (1/60)	14
第20図	D-2区1号竪穴住居出土土器実測図 (1/4)	14
第21図	D-2区1号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	15
第22図	D-1区土坑実測図① (1/40)	16
第23図	D-1区土坑実測図② (1/40)	17
第24図	E区遺構配置図 (1/400)	18
第25図	E区土坑実測図① (1/40)	19
第26図	E区土坑実測図② (1/40)	20
第27図	E区土坑実測図③ (1/40)	21
第28図	その他の遺物実測図 (1/4・1/2)	21

## 表 目 次

第1表	竪穴住居観察表	23
第2表	掘立柱建物観察表	23
第3表	土坑観察表	23
第4表	出土土器観察表	24
第5表	出土石器・鉄器観察表	24

## 写真図版目次

写真図版1	A区全景、4～7・9・14・17号土坑、ピット2
写真図版2	B区全景、2・4・6・8～12号土坑
写真図版3	C区全景、1・2号竪穴住居、1号掘立柱建物
写真図版4	D-1区全景、3・6・9・10・13・14号土坑
写真図版5	D-2区全景、1号竪穴住居
写真図版6	E区全景、1・4・6・7・9・10・12・14～16号土坑
写真図版7	出土遺物
写真図版8	復元住居の整備
写真図版9	遺跡全景、現在の復元住居

## I. 調査に至る経過と組織

今回の調査原因となった西有田工業団地造成は日田市の企業誘致事業の一環として進められてきたもので、ニッカウキスキー株式会社日田工場進出に先立ち実施したものである。この企業誘致が決定した昭和61年2月15日には日田市商工観光課より埋蔵文化財の取り扱いについての照会文が市教委に提出された。これを受けた市教委は当該事業予定地北側が柴尾遺跡に該当し、通称葛ヶ原台地上にはその立地からして遺跡が存在する可能性が十分考えられることから事前の確認調査を必要とすると判断し、その旨を文書回答した。

その後、双方による数回の協議を重ねたところ、今回の企業誘致が日田市の重点事業と位置付けられ工場建設を遅らせることができないという理由から、この段階では団地造成範囲の最終的な場所の確定はしていなかったが、早急なる埋蔵文化財の有無の判断の必要に迫られて、市教委は事前の遺跡有無の確認調査を実施することとなった。

確認調査は台地全域を対象に13ヶ所の調査区を設定して昭和61年2月24日から3月26日まで行い、その結果弥生時代から古墳時代を中心とする遺構が確認された。<sup>(註1)</sup>この後、企業立地の造成場所と具体的な計画が決定したため、再び遺跡の取り扱いについて両者間で協議を行い、前回の確認調査をより精査する目的で再度事業対象予定地の試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は昭和62年3月26日～4月22日まで行い、古墳時代の竪穴住居などの遺構が検出された。この結果を踏まえて、市教委は土地開発公社に遺跡の現状保存について協議を行ったが、造成工事による掘削部分の保存が不可能なことから記録保存のための発掘調査を実施することとなった。昭和62年4月30日には埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官充てに提出して調査準備を行うとともに、昭和62年5月13日には日田市土地開発公社理事長と日田市教育委員会教育長名による発掘調査に関する委託契約を締結し、5月末より発掘調査を開始し、11月の初めには調査を完了した。

以下、調査日誌より調査の進行内容を簡単に記す。

5月25日／器材・テント等を搬入して調査を開始し、A区の表土剥ぎを機械で行う。

6月10日／この日からB・D区の表土剥ぎを機械で行い、遺構検出作業を始める。

6月17日／D区において竪穴住居を検出し、その後掘下げを行う。

7月8日／この日からC区、翌9日からはE区の表土剥ぎを機械で行い始める。

以後、作業員による遺構検出作業を行うが、夏の間は水がない台地であることから、作業が思うように進まなかった。

9月7日／この日からB・D区の遺構を本格的に掘り下げを行う。

9月30日／この日からはA・C区の本格的な遺構の掘り下げを行う。

10月2日／各調査区での遺構もほぼ掘りあがり、本格的な実測作業や写真撮影を行う。

10月12日／この日をもってA区の調査が終了し、14日にはB区の調査、30日にはC区の調査がそれぞれ終了する。

11月4日／この日にD・E区の写真撮影と器材の撤収を行い、全ての調査を完了した。

調査終了後の11月11日には日田警察署長充てに埋蔵文化財発見届を提出し、11月25日には埋蔵物の文化財認定を受け、昭和63年4月から平成元年3月末までの間、整理作業を行った。

なお、発掘調査に関する組織等は、次のとおりである。（職名は、当時のままとしている。）

昭和61～63年度（1986～1988年）／試掘調査・発掘調査・整理作業

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 橋原 芳彦（日田市教育委員会教育長）  
調査総括 石松 安次（日田市土地開発公社理事長） 大場 忠助（同常務理事）  
河津 信男（同局長） 山田 範雄（同局長）  
橋 昭寿（同次長） 矢幡 英雄（同企画管理係長）  
石井 英信（同庶務係長）  
木藪日出士（日田市企業立地対策室室長） 諫山 和男（同係長）  
矢野 友章（日田市教育委員会次長） 川津 三郎（同管理課理財係長）  
調査事務 武石 邦男（日田市立博物館館長）  
小埜サダ子（同事務員）  
調査指導 後藤 宗俊（大分県教育委員会文化課主幹）  
清水 宗昭（同係長）  
調査担当 土居 和幸（同学芸員）  
友岡 信彦（同囑託、現大分県教育委員会）  
調査補助員 小野 信彦、行時 志郎、藤本 啓二（別府大学生）、江藤 和幸（琉球大学生）  
発掘作業員 赤尾シナエ、秋吉カズエ、秋吉 熊友、秋吉ケイコ、秋吉ひろみ、安心院ハル子、  
足立 米子、諫山 愛子、諫山 秋子、諫山 公子、諫山ゆみ子、伊藤 サヨ、  
内野たか子、梅木 末広、猪熊 辰子、巖 典子、太田 幸男、蒲池 京子、  
川津 信子、北沢イクコ、栗秋みずえ、栗山アサカ、後藤 大助、後藤ツヤコ、  
坂本 和代、佐藤千代吉、貞清カナエ、白石 正信、高倉 慶、武内かずこ、  
立花 幸、立花みゆき、長尾トラ子、中島 富子、中島マサ子、中塚 恭子、  
西竹 政利、藤原ナツエ、森山 明美、森山エミコ、森山敬一郎、森山 孝子、  
森山 信義、森山 好美、吉長クニコ、了正美代子  
整理作業員 梶原喜久子、川西 厚子、栗山ひろみ、古城 祥子、財津 朱美、佐藤 昇代  
来訪者 高橋 信武、小柳 和宏、田中 祐介（以上、大分県教育委員会文化課）

平成15年度（2004年）／報告書作成

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 諫山 康雄（日田市教育委員会教育長）  
調査総括 後藤 清（同文化課長）  
調査事務 高倉 隆人（同文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）  
伊藤 京子（同文化課副主幹）  
報告書担当 土居 和幸（同文化課主査）  
製 図 藤野 美音（同文化課調査補助員）

註1）当初は柴尾遺跡として周知されていたが、遺跡が広範囲に存在することから葛原遺跡と改めた。

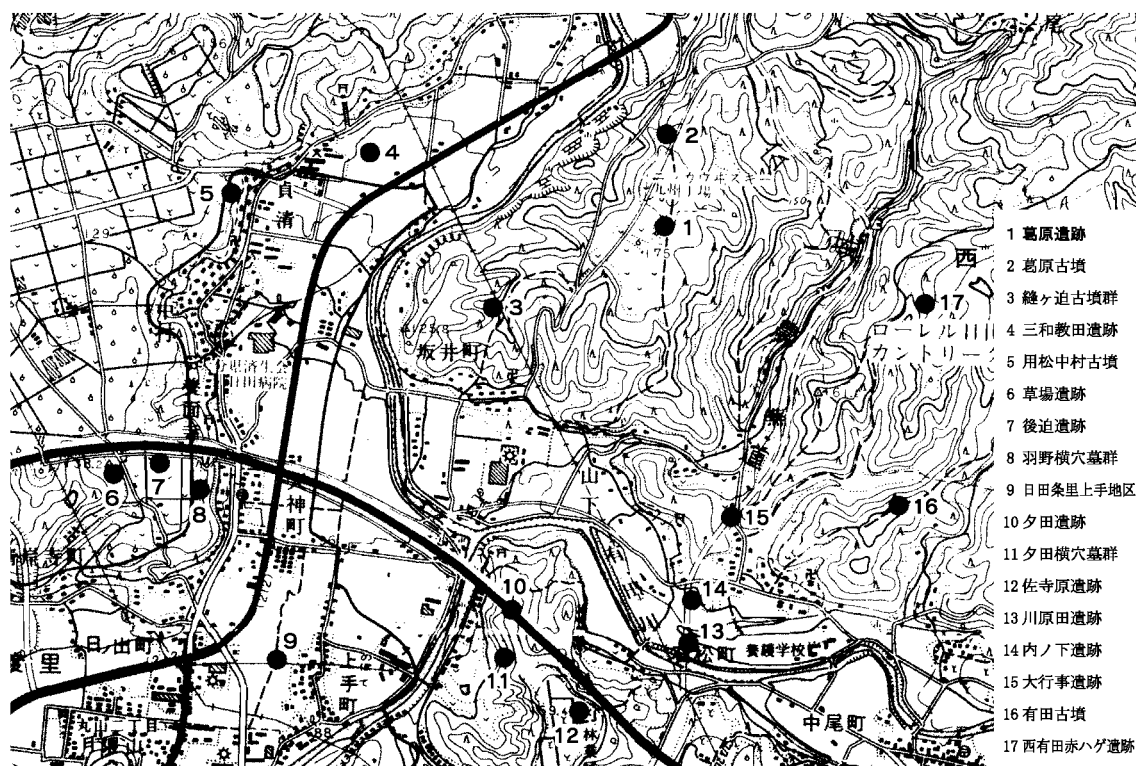
註2）確認調査の内容についても今回報告予定であったが、予算の都合上割愛し、別の調査地区の報告書に掲載することとした。

## II. 遺跡の立地と環境

葛原遺跡は日田市北東部の標高170m前後の通称葛ヶ原と呼ばれる広さ約16haの台地上に位置する。台地の西側を花月川が南へ、南側をその支流である有田川が西へと流れて合流しており、東側は急な谷部を形成している。両河川は台地に接するように流れており、このため台地下における沖積地の面積は狭い。緩やかな起伏がみられる葛ヶ原台地上は主に畑や山林として利用されており、斜面部は杉林で覆われている状況にある。

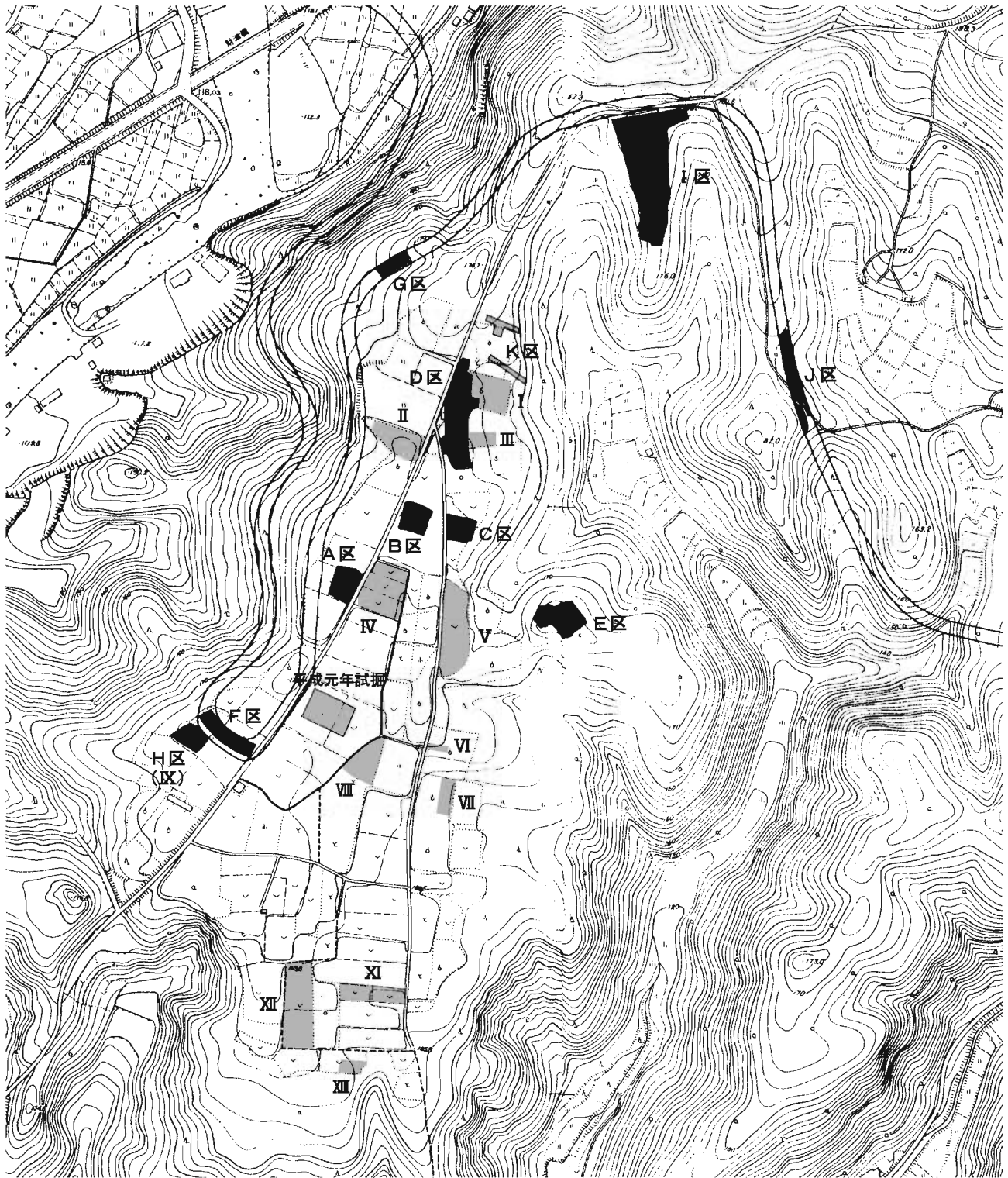
周辺の遺跡を概観すると花月川流域の沖積地には三和教田遺跡(4)や日田条里上手地区(9)が存在する。三和教田遺跡では9次の調査によって旧石器時代～中世の複合遺跡であることが判明し、弥生時代の環濠集落が発見されている。また右岸の山田原台地には弥生時代の大規模集落である後迫遺跡(7)や方格規矩鏡片が発見された草場遺跡(6)、用松中村古墳(5)が所在し、台地東斜面には5～8世紀の羽野横穴墓群(8)が営まれている。一方、有田川下流域の沖積地には内ノ下遺跡(14)や川原田遺跡(13)が存在し、低丘陵には古墳時代の集落が調査された大行事遺跡(15)、丘陵上には古墳時代中期の有田古墳(16)や古墳時代集落が発見された西有田赤ハゲ遺跡(17)が位置する。対峙する佐寺原台地上の佐寺原遺跡(12)では弥生時代前～後期の集落が発掘され、その先端部には夕田遺跡(10)、台地斜面には5世紀～7世紀の夕田横穴墓群(11)の調査が実施されている。

さて、葛原遺跡ではこれまでに6回の発掘調査が行われている。F区では弥生時代前期の土坑群、H区では弥生時代前・中期の竪穴住居など、I区では縄文時代後期の竪穴住居など、J区では古墳時代後期の竪穴住居などが発見されている。これらの調査は台地(遺跡)の北側に集中しているが、遺構は台地全面に展開している。本格的な調査は行われていないが遺跡南側には中世の城跡、さらに斜面中腹には3基の円墳で構成される縫ヶ迫古墳群(3)が知られている。また、台地の北側には葛原古墳(2)が存在し、さらに遺跡の北に隣接する山頂は中世の城跡としての言い伝えが残る。



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)





第2図 調査区配置図 (1/5,000)

A~F・H~J区は、発掘調査実施区  
それ以外は、試掘・確認調査実施区

(参考文献)

- 土居 和幸編 「葛原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』 日田市教育委員会 1988年
- 永田 裕久編 「葛原遺跡日地点」『平成6年度 日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1996年
- 土居 和幸編 「葛原遺跡」『平成8年度 日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1998年
- 田中裕介他編 『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 大分県教育委員会 1999年
- 渡邊 隆行編 『葛原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第39集 日田市教育委員会 2002年

### Ⅲ. 調査の記録

#### (1) 調査の概要 (第2図)

調査は工場建設による切土掘削箇所4ヶ所の対象地を第2図のとおりA～E区と呼び分けて実施したが、D区については便宜的にD-1区とD-2区に区別した。各調査区とも遺構を検出した地山面は暗茶色を呈するハードローム地盤で、晴の日が続くと固くひび割れをおこし、雨天の際は粘性が強い土質である。

なお、各調査区の調査面積はA区589㎡、B区553㎡、C区391㎡、D-1区698㎡、D-2区943㎡、E区828㎡で、計4,002㎡である。

#### (2) A区の調査 (第3図)

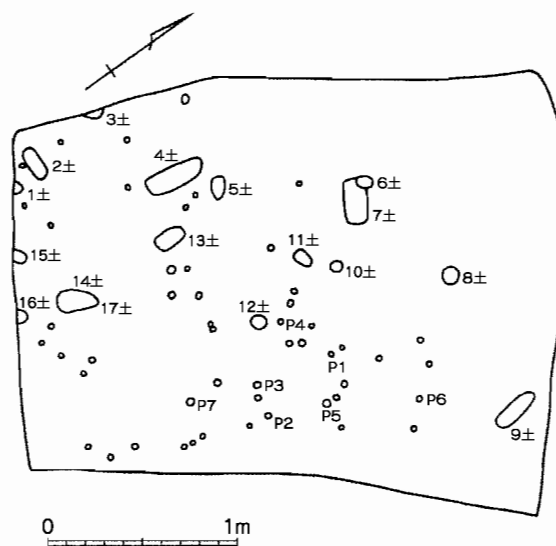
この調査区で検出した遺構は土坑17基とピット50のみで、これら遺構は調査区のほぼ全面に広がっている。13基検出した土坑は、その平面形により円形(8・10・12号)、楕円形もしくは長方形(2・4・6・7・9・13・17号)、不整形(5・11・14号)に分けられ、これら土坑からの遺物の出土量は少ない。また、ピットには径が10cmにも満たないものもあり、柱穴というよりも木根痕と考えられるものも散見され、建物に復原できそうな柱穴は確認できていない。

##### 土坑 (第4～6図、図版1・7)

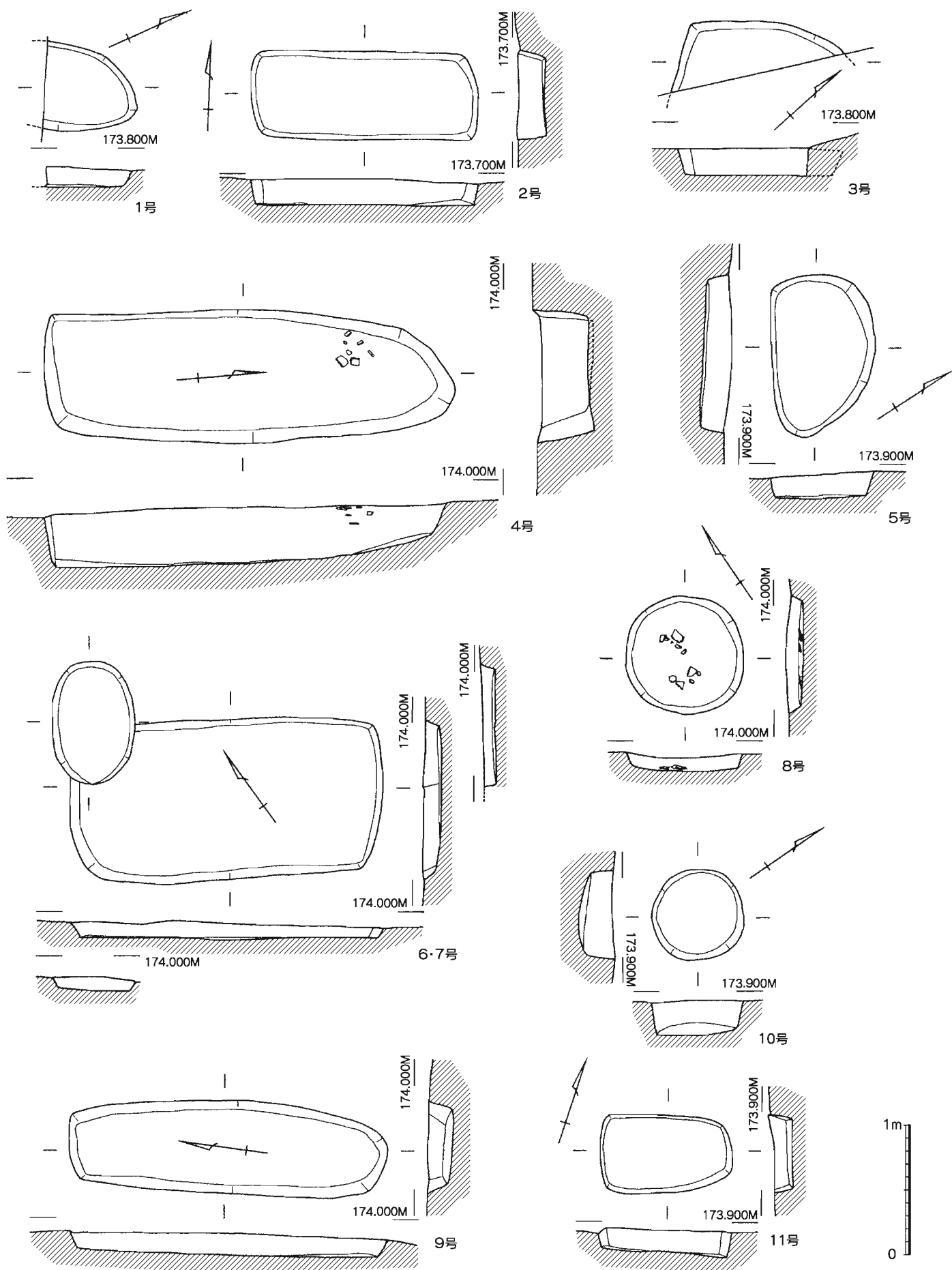
1号はその一部のみを検出した。2号からの遺物の出土はない。3号はその一部を検出した。4号は埋土上層から、図示はしていないが縄文土器片が出土している。5号からは縄文土器片が出土している。第6図1は深鉢の口縁部で、短く直立する。口縁部外面には一条の沈線が巡っている。このほかにも打製石斧の破片が出土している。6号は7号を切る。遺物の出土はない。8号の床面直上からは図示はしていないが縄文土器の深鉢と考えられる破片が出土している。9号～12号は、遺物の出土はない。13号からは図示はしていないが縄文土器片が出土している。14号は大型で、深さが深い。第6図2は深鉢の胴部である。打製石斧の破片も出土している。15号はその一部を検出した。第6図3は浅鉢の口縁部である。16号はその一部を検出。遺物の出土はない。17号からの遺物の出土はない。

##### ピット (第3・6図、図版1・7)

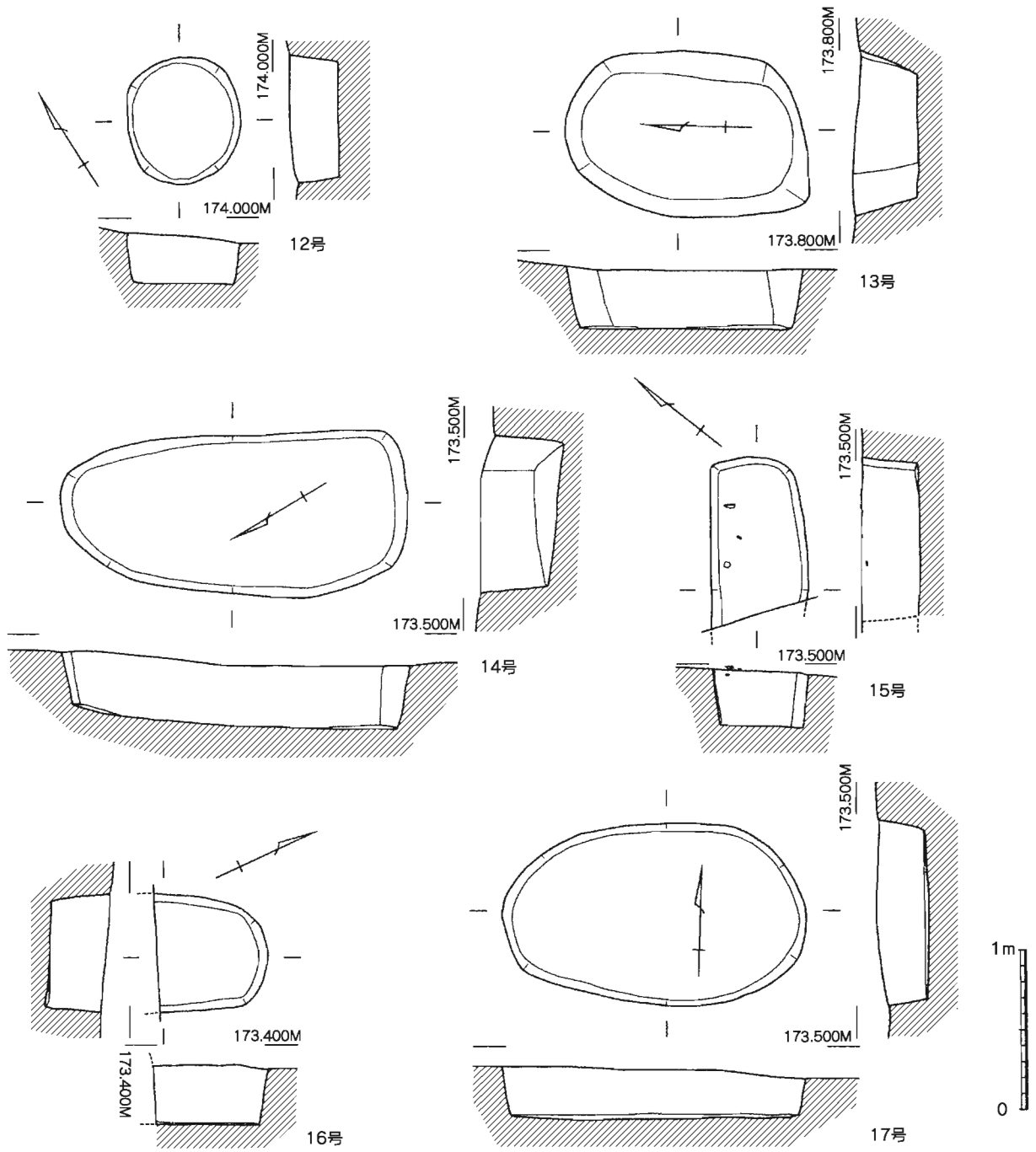
ピット2からは縄文土器が出土している。第6図4は粗製の深鉢形土器の口縁部である。頸部が外に緩やかに開き、口縁は短く立ち上がる。磨耗が著しい。第6図5も粗製の深鉢形土器の胴部で、逆「く」字状に屈折する。第6図6は浅鉢である。胴部は屈曲し、口縁は短く外反する。ピット3からも図示はしていないが縄文土器が出土している。ピット7からも縄文土器が出土している。第6図7は浅鉢の口縁部である。8は深鉢の底部であろうか。



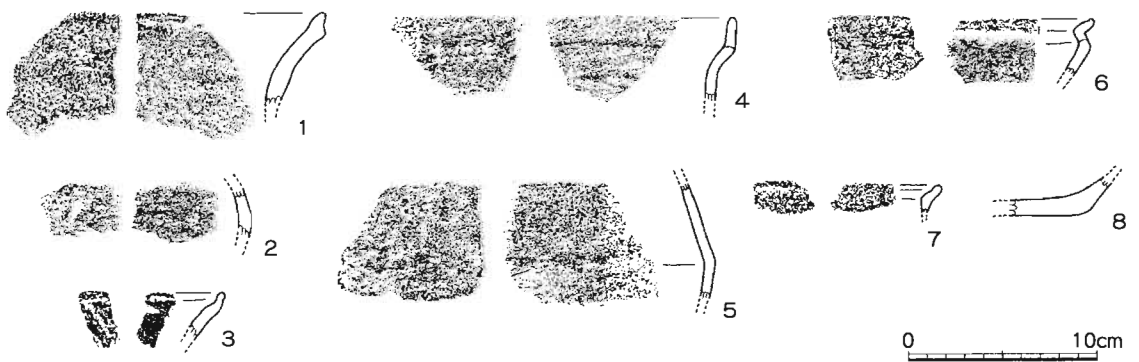
第3図 A区遺構配置図 (1/400)



第4图 A区土坑实测图① (1/40)



第5図 A区土坑実測図② (1/40)



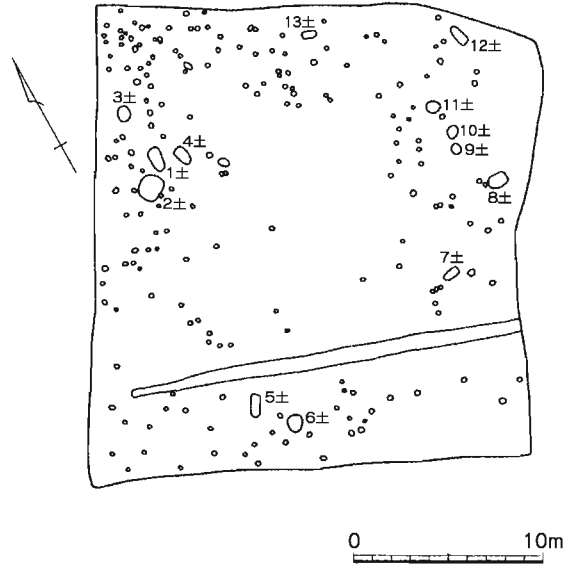
第6図 A区土坑・ピット出土遺物実測図 (1/4)

(3) B区の調査 (第7図、図版2)

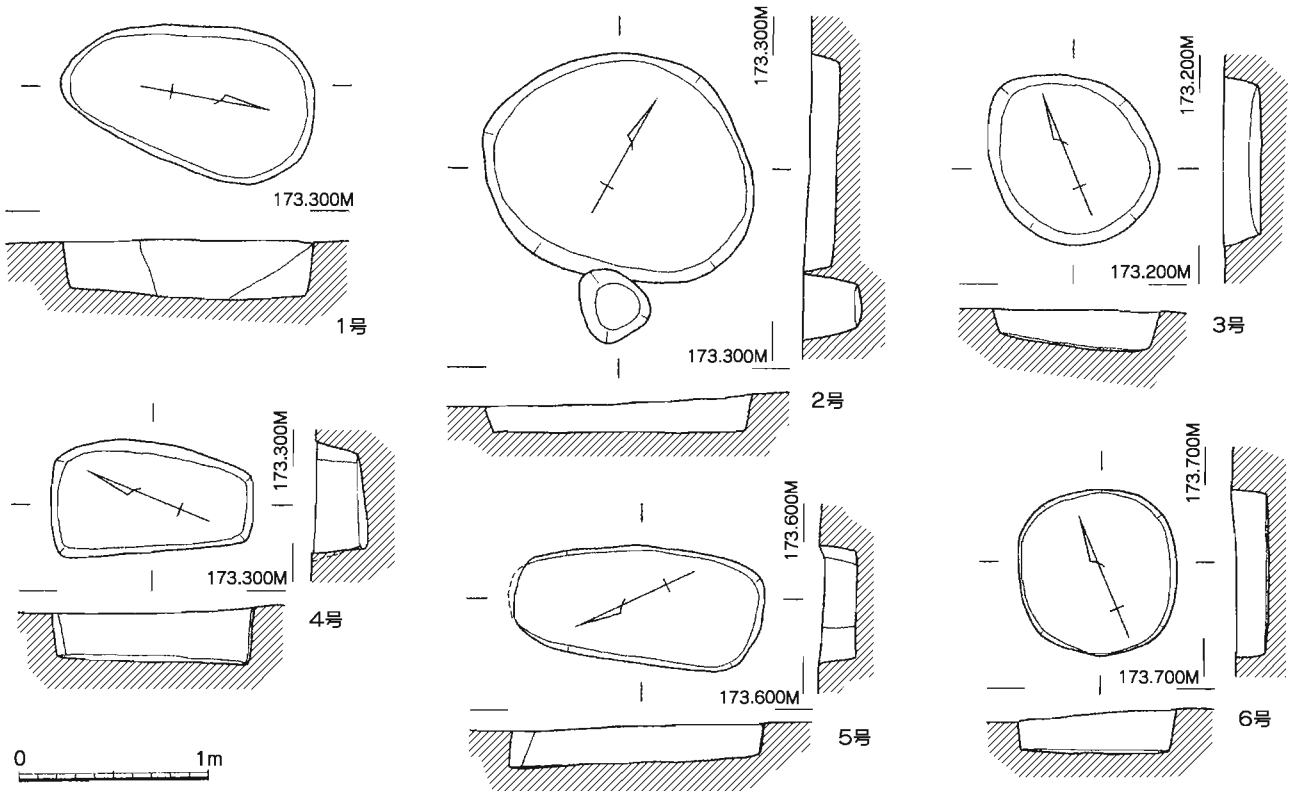
この調査区はA区の北50mにあたり、検出した遺構は土坑13基とピット194である。これら遺構は調査区中央部での遺構密度が希薄で周辺に分布している。13基検出した土坑は、その平面形が円形(6・9・11号)、楕円形もしくは長方形(4・5・12・13号)、不整形(1~3・7・8・10号)に分けられる。これら土坑からは遺物の出土がほとんどみられない。また、ピットも建物に復原できそうな柱穴は確認できていない。

土坑 (第8・9図、図版2)

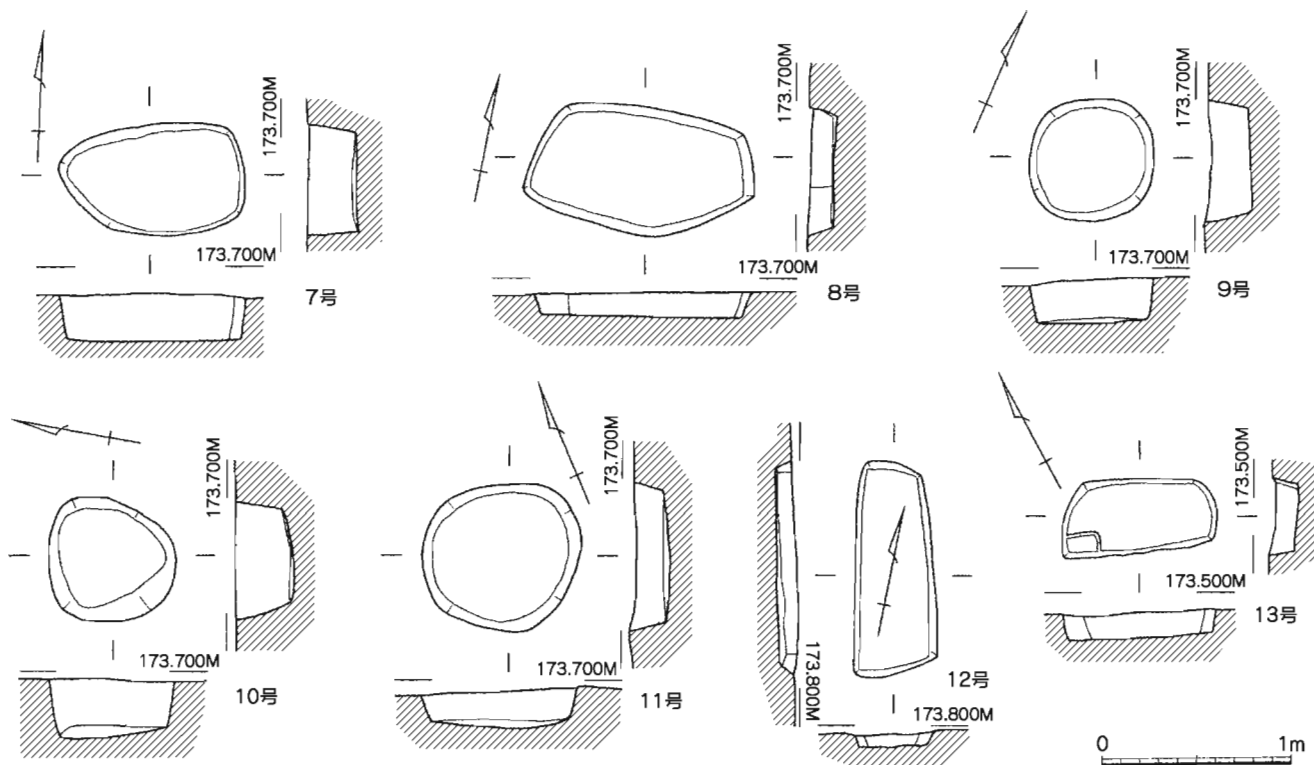
1号は深さが深い。この土坑からは図示していないが縄文土器片が出土している。2号は大型である。3・4・6・7号は深さが深い。9~11号は小型であるが、深さが深い。12・13号は深さが浅い。



第7図 B区遺構配置図 (1/400)



第8図 B区土坑実測図① (1/40)



第9図 B区土坑実測図② (1/40)

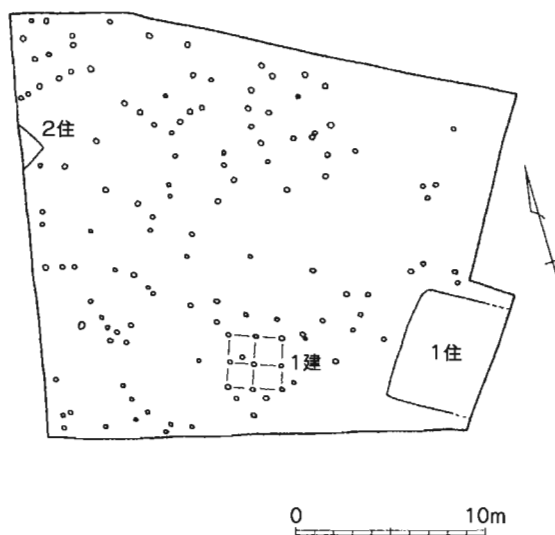
#### (4) C区の調査 (第10図、図版3)

この調査区はB区西側約20mの台地端部にあたる。このため調査区全体的が西側方向に向って緩やかな傾斜をなしている。

この調査区で検出した遺構には竪穴住居2軒と掘立柱建物1棟、ピット 121であり、これらの遺構は調査区のほぼ全面に広がりを見せている。確認したピットからの遺物の出土はみられなかった。

##### 1号竪穴住居 (第11・12図、図版3・7)

この竪穴住居は調査区南隅で検出した。その規模は東西が4 m37cm +  $\alpha$ 、南北が6 m17cmで、深さは6~25cmを測る。竪穴住居の南西側は削平を受けており、残りは決して良くない。住居東側の壁面にはカマドが付設されており、壁面沿いには壁周溝が巡っている。支柱穴はP 1・2の2本を確認しており、その位置関係からして4本柱の構造と考えられる。カマドについては削平が著しく、また木痕などによって大半が破壊を受けており、径40cm程度の火床面の検出にとどまった。遺物



第10図 C区遺構配置図 (1/400)

の出土状況は依存状況の良い竪穴住居東側に認められ、土器片や石が出土している。また第14図に示した遺物のほかにも、須恵器の甕片や甕片、土師器片などの遺物が出土している。この竪穴住居の床面積は残存で22.23㎡、カマドが中心に据えていたと仮定した場合は34㎡と推定される。

### 出土遺物

#### 須恵器（第14図、図版7）

1は坏蓋である。天井部を欠く。返りは短く内傾し、端部は丸く仕上げる。内面に|のヘラ記号が残る。復元口径11.2cmを測る。埋土中より出土した。2も坏蓋である。1同様に天井部を欠く。返りを持たず、口縁部は真っ直ぐに下る。復元口径12.6cmを測る。埋土中より出土した。3は坏身である。底部を欠く。返りを持たず、口縁部が内碗気味に外反し、端部は丸く仕上げている。復元口径12.4cmを測る。埋土中より出土した。

#### 土師器（第14図、図版7）

4～9は甕である。4は口縁部が短く肥厚し、「く」字状に外反する。復元口径18.2cmを測る。埋土中より出土した。5は口縁部が長く、「く」字状に外反する。復元口径21.4cmを測る。埋土中より出土した。6は口縁部が「く」字状に外反する。復元口径18cmを測る。床面近くからの出土である。7は口縁部が直線的に外反する。復元口径18.2cmを測る。埋土中より出土した。8は小型品である。口縁部が短く、「く」字状に外反する。復元口径11.8cm、胴部最大径13.7cmを測る。床面近くからの出土である。9は口縁部が短く、「く」字状に外反する。復元口径28.2cmを測る。カマド内より出土した。10～12は甕である。10は口縁部が短く、直線的に外反する。復元口径26cmを測る。11は底部である。復元底径11cmを測る。11と12は同一個体の甕で、いずれもカマド内より出土した。12は甕の把手である。床面直上より出土した。

#### 鉄器（第15図、図版7）

1は鉄鏃であろう。身の部分と茎部の一部が欠損する。

#### 石器（第15図、図版7）

2はスクレイパーである。自然面を残す縦長剥片を利用し、ポジ面左側辺にネガ面側からの二次加工が施されている。安山岩製。

### 2号竪穴住居（第13図、図版3）

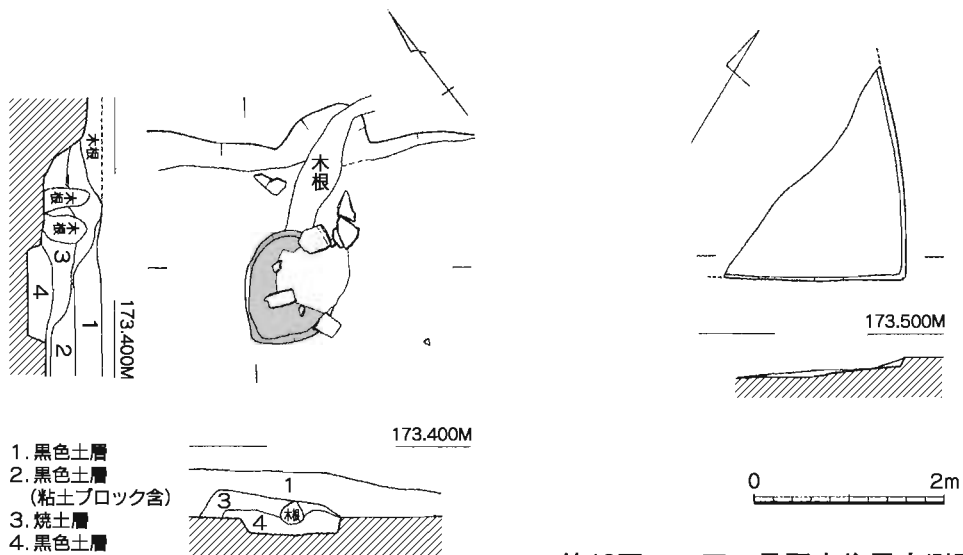
調査区北西側で検出した。竪穴住居かどうか疑わしい点もあるが、底面がしっかりとしており、また埋土層が1号竪穴住居に類似していることから竪穴住居として捉えた。その規模は東西が1 m 43cm + α、南北が1 m 70cm + α、深さは7 cmを測る。上部の削平が著しく、残りは決して良くない。遺物は出土していない。

### 1号掘立柱建物（第16図、図版3）

1号竪穴住居の西側で検出した。規模は2間×2間の総柱建物で、柱間寸法は心心距離で東西軸長が2 m 89cm～2 m 90cm、南北軸長が2 m 85cm～3 m 03cmを測る。床面積は8.69㎡を測る。柱痕跡は確認できず、深さは38～59cmを測る。遺物は出土していない。



第11図 C区1号竖穴住居実測図 (1/60)

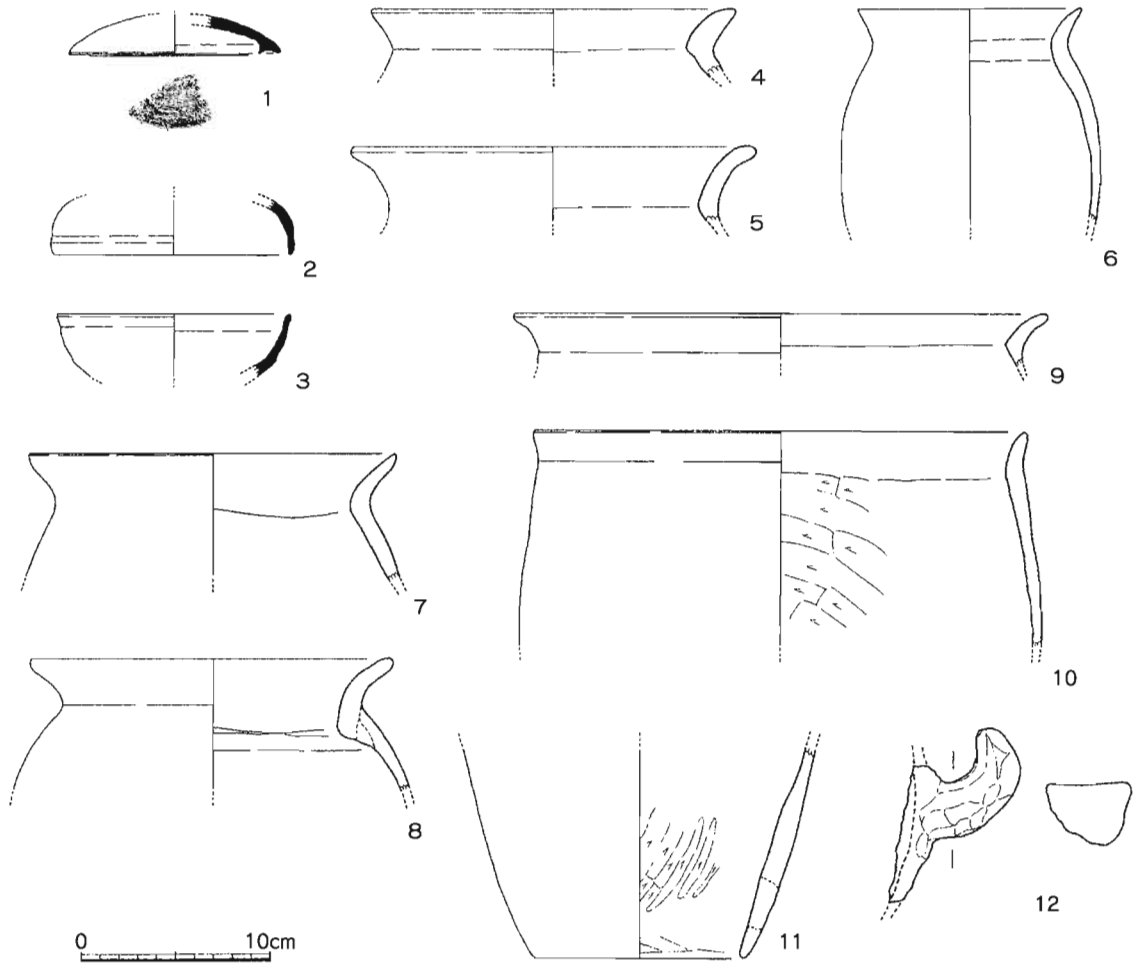


- 1. 黒色土層
- 2. 黒色土層  
(粘土ブロック舎)
- 3. 焼土層
- 4. 黒色土層

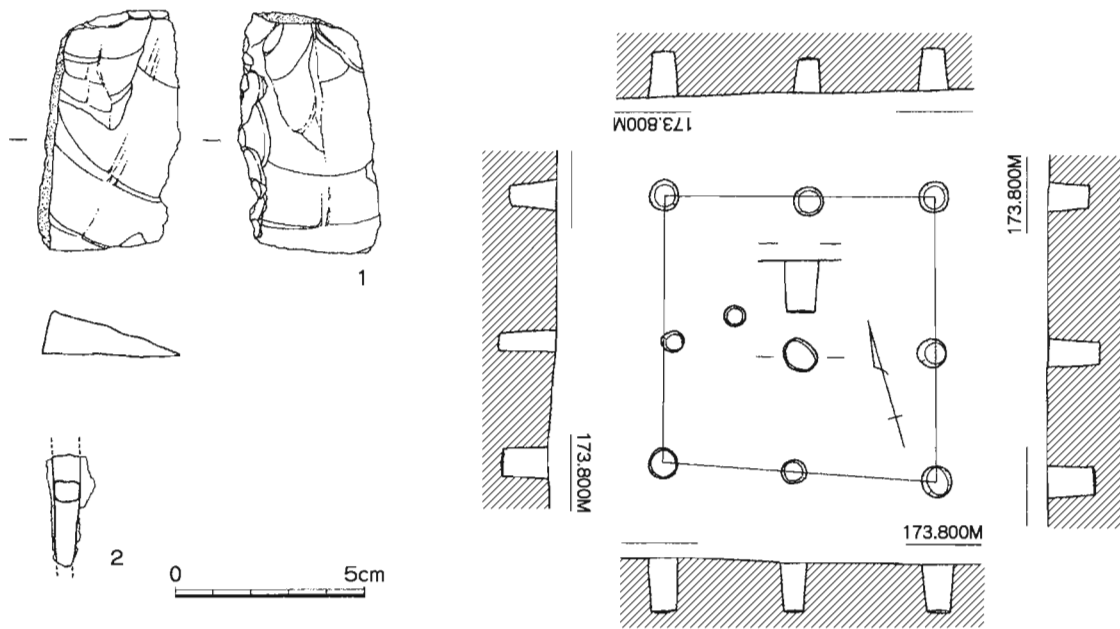
第13図 C区2号竖穴住居実測図 (1/60)

第12図 C区1号竖穴住居カマド実測図 (1/30)





第14图 C区1号竖穴住居出土土器实测图 (1/4)



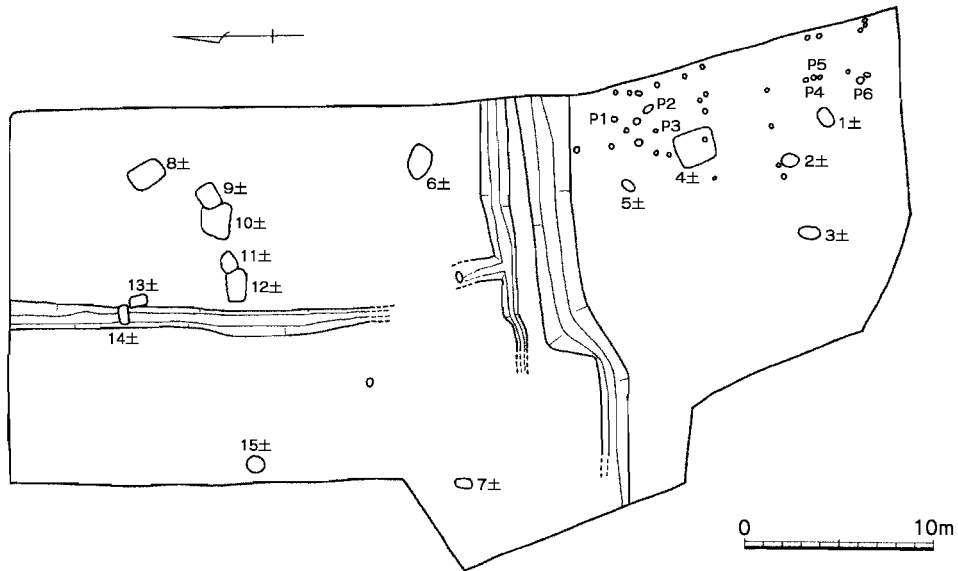
第15图 D-2区1号竖穴住居  
出土石器・鉄器实测图 (1/2)

第16图 C区1号掘立柱建物实测图 (1/80)

(5) D区の調査 (第17・18図、図版4・5)

D-1・2区はC区の北約50mの位置にあたる。この2つの調査区の地形は、D-1区の南西側からD-1区の北東側にかけてはやや急な傾斜となっているが、D-2区では西側から東側に向けて比較的緩やかに傾斜している。

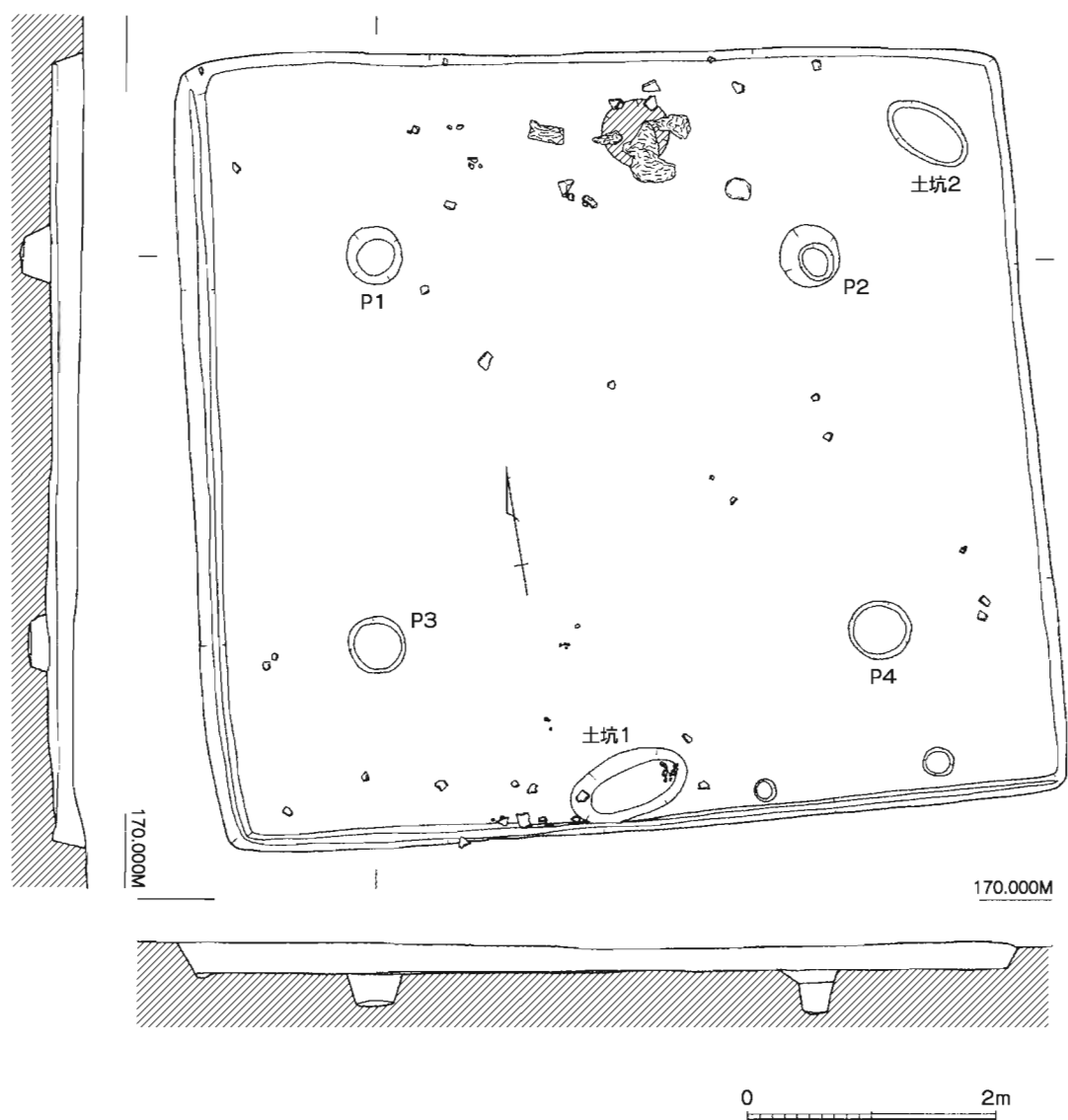
このD-1区とD-2区で検出した遺構は竪穴住居1軒と土坑15基、ピット177である。これら遺構はD-1区側には土坑が集中して残っているが、ピットは南東隅の限られた範囲にしか認められない。また、D-2区ではD-1とは対照的にピットがほぼ全域に集中して認められるが、土坑は存在していない。



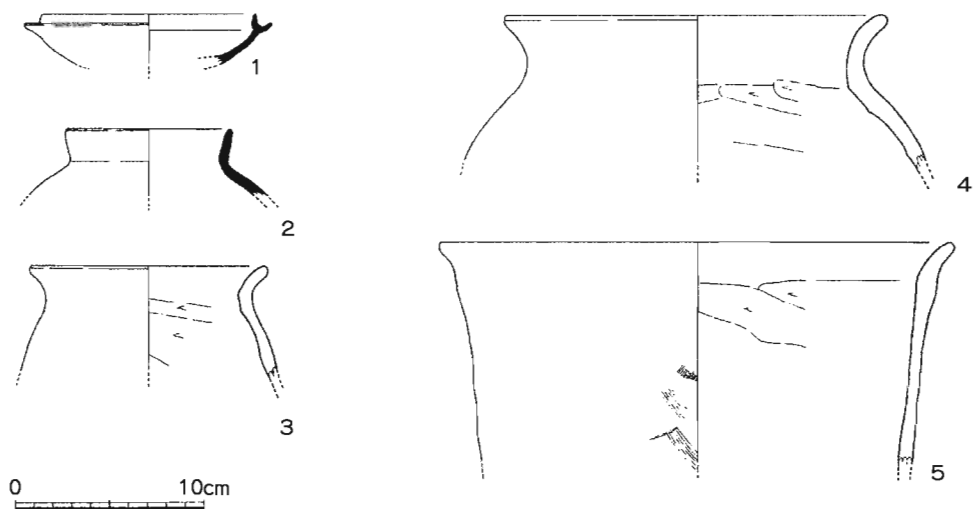
第17図 D-1区遺構配置図 (1/400)



第18図 D-2区遺構配置図 (1/400)



第19图 D-2区1号竖穴住居实测图 (1/60)



第20图 D-2区1号竖穴住居出土土器实测图 (1/4)

1号竪穴住居は、検出段階ではその一部しか確認できていなかったが、東側へと調査区を拡張して調査を実施した。

15基検出した土坑は、その平面形によって円形（2・15号）、楕円形もしくは長方形（1・3・5・7・8・12～14号）、不整形（4・6・9～11号）に分けられる。これら土坑からの遺物の出土量は少ない。

また、ピットについては幾つのピットからは遺物が出土したものの、建物に復原できそうな柱穴は確認できなかった。

### 1号竪穴住居（第19・21図、図版5）

この竪穴住居はD-2区の南東隅で検出した。竪穴住居の規模は東西が6 m89cm、南北が6 m41cmで、検出面からの深さは10～27cmを測る。比較的残存状況は良い。竪穴住居北側の壁面中央にはカマドが付設されており、西および南壁面には壁周溝が巡っていた。支柱穴はP 1～4の4本が確認できたことから、4本柱の住居構造である。北側のカマドと反対側の南側壁面中央部には長軸が94cm、短軸が53cm、深さ15cmを測る平面が楕円形を呈する土坑1が存在する。また、カマドの東側にあたる北東コーナー付近にも長軸74cm、短軸42cm、深さ13cmを測る楕円形を呈す土坑2が存在している。カマドについては既にその大半が破壊を受けており、径50cm程度の火床面とその西側に袖石1つが立った状態で残存していた。この火床面上部にはカマドの袖石や天井などに使用されたと考えられる石片の散乱が認められた。竪穴住居の埋土は大きく2層に分けられ、壁面近くの黒茶褐色土（2層）以外は、全体的に茶褐色土（1層）であった。遺物はこの埋土の1層中より土器片が出土しているが、カマド付近と土坑1付近を中心として比較的大きな土器片がまとまって出土した。図示した遺物のほかにも須恵器片や土師器碗などの土器片が出土している。この竪穴住居の床面積は38.64㎡である。

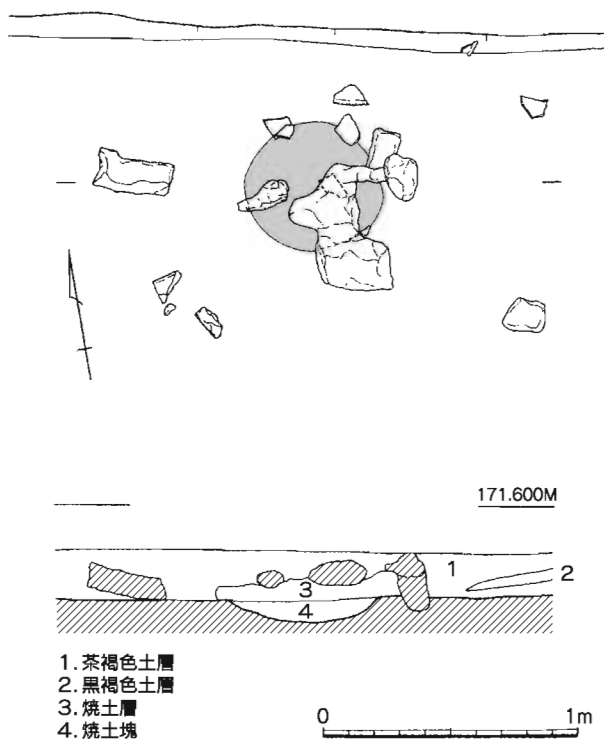
### 出土遺物

#### 須恵器（第20図、図版7）

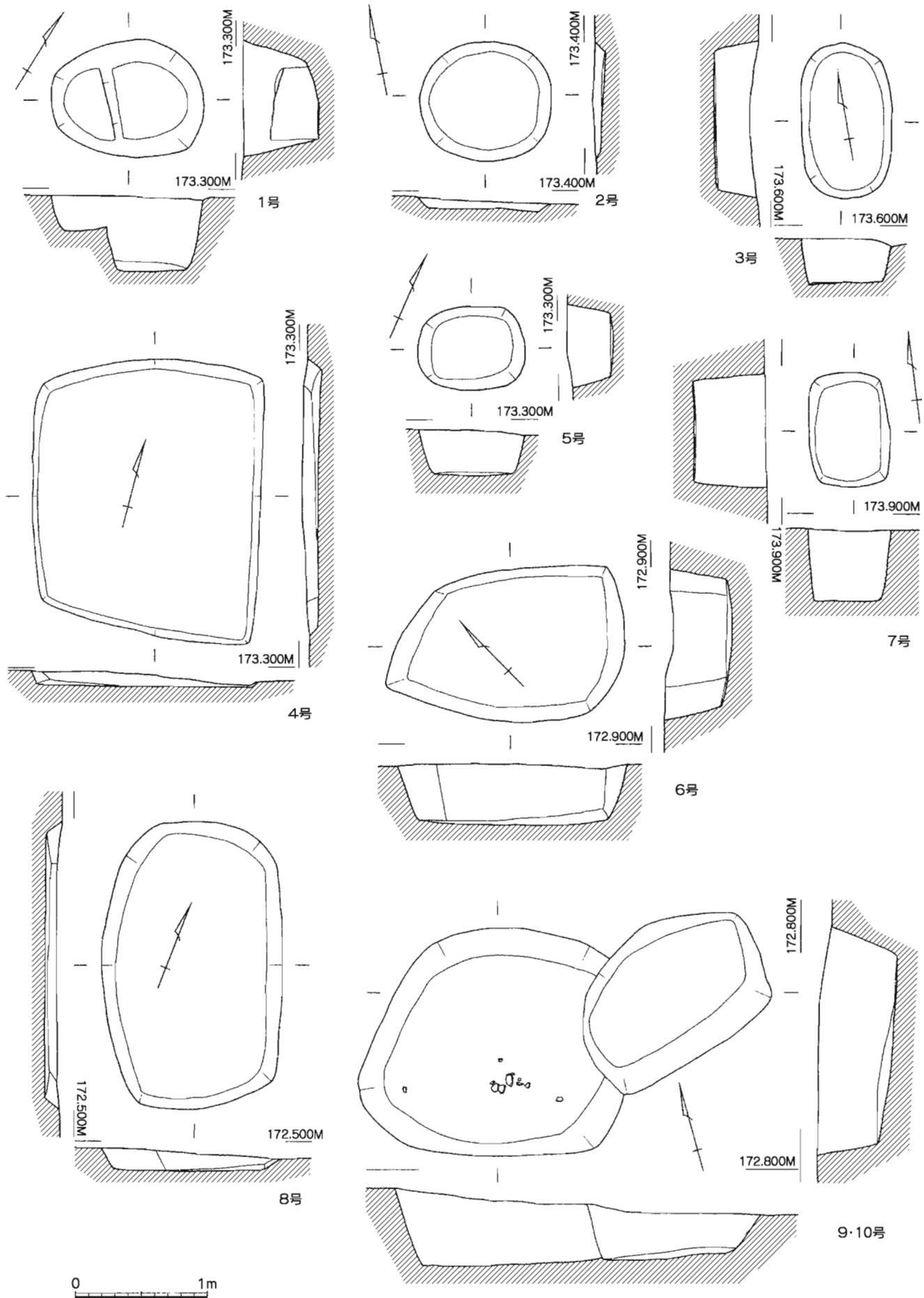
1は坏身である。底部を欠く。蓋受けの返りが、内傾しながら短く立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。復元口径11.2cmを測る。P 4近くの床面からの出土である。2は埴である。口縁部は短く、やや外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。復元口径8.8cmを測る。カマド周辺の床面近くからの出土である。

#### 土師器（第20図、図版7）

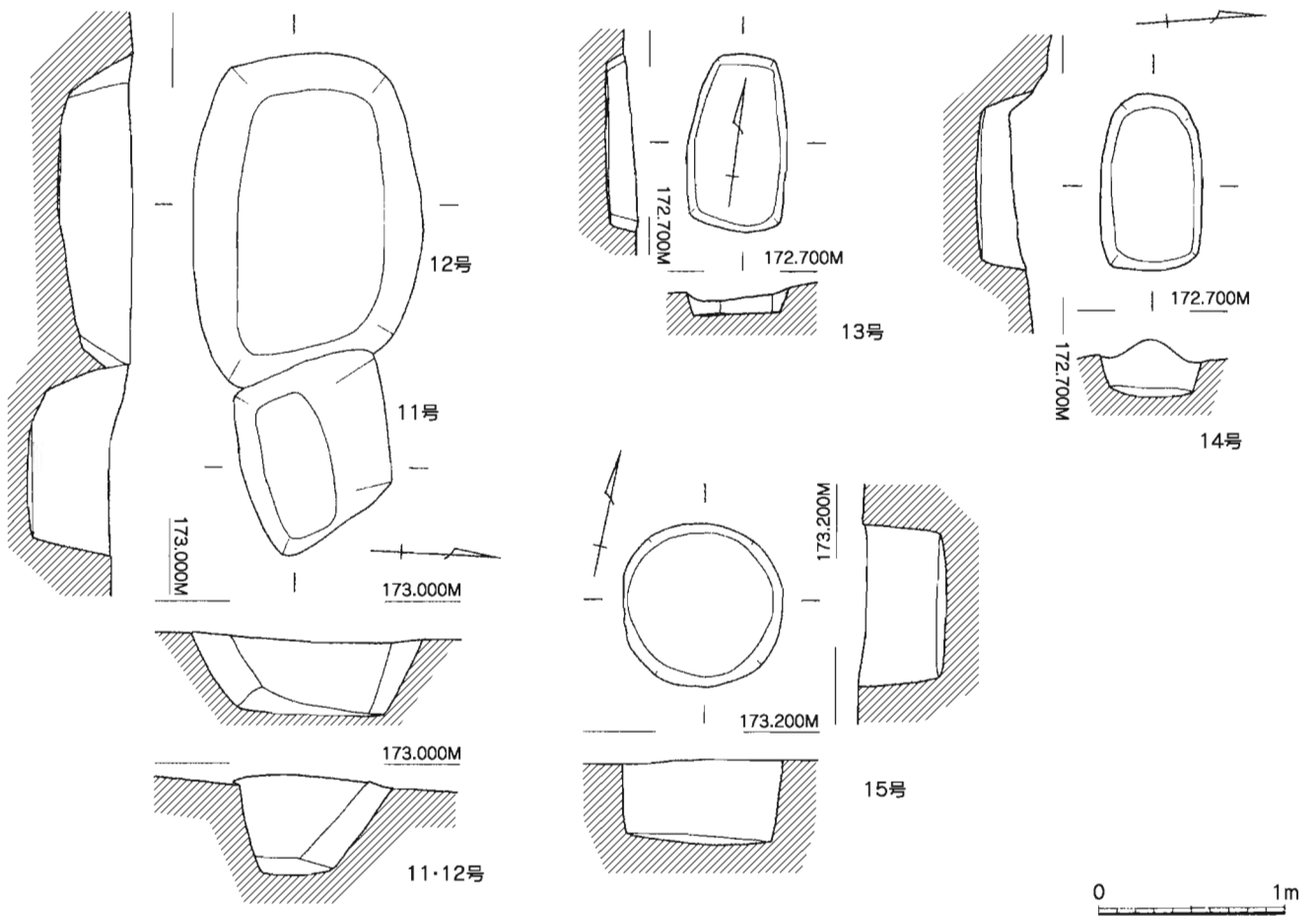
3・4は甕である。3は口縁部が大きく外反する。内面はへら削り。土坑1周辺の床面よりやや浮いた状態で出土した。4は小型の甕で、口縁が短く、外反する。内面はへら削り。土坑1周辺の床面より浮いた状態で出土した。5は甗である。口縁部が短く、わずか



第21図 D-2区1号竪穴住居カマド実測図(1/30)



第22図 D-1区土坑実測図① (1/40)



第23図 D-1区土坑実測図② (1/40)

に外反する。外面にハケの痕跡を残す。カマド内より出土した。

#### 土坑 (第22・23図、図版4)

1号は二段掘りをなす。2号は深さが浅い。3号は小型であるが深さは深い。4号は大型であるが深さは浅い。5号は小型であるが深さは深い。6・7号は深さが深い。8号は大型であるが深さは浅い。9・10号は切り合い関係にあり、9号が10号を切る。10号からは土器小片が出土している。11・12号も切り合い関係にあり、11号が12号を切る。13～15号は小型である。10号を除く土坑からは遺物は出土していない。

#### ピット (第17図)

ピットのうち、ピット1～4・6からは土師器の破片が出土している。いずれも小片で器種等がはっきりしないため、図示はしていない。

## (6) E区の調査 (第24図、図版6)

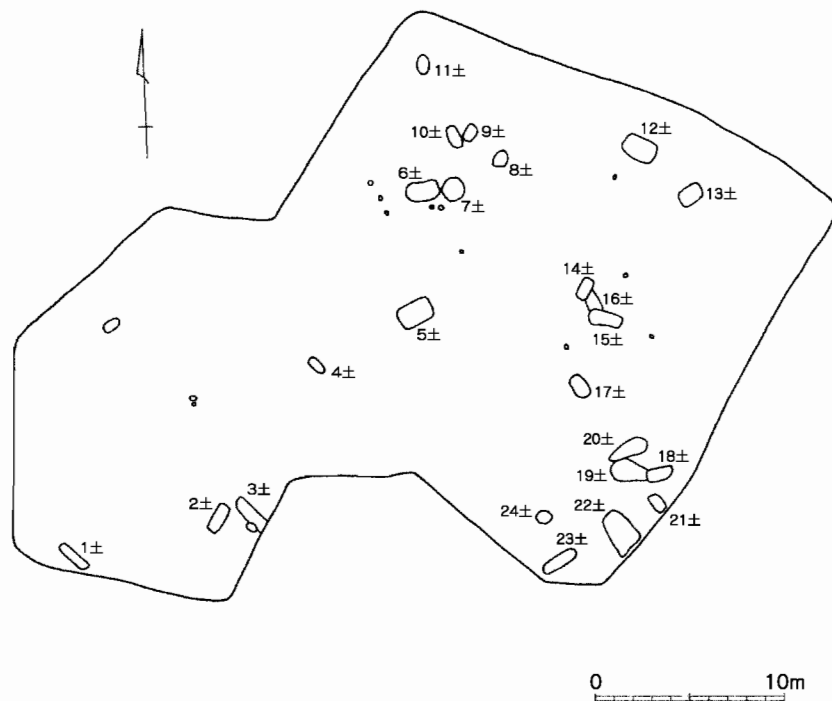
この調査区はC区の東側約100mの台地舌部上にあたり、地山は調査区のほぼ中央部を中心に東西方向へと緩やかに傾斜している。この調査区で検出した遺構は土坑25基とピット13のみで、全体的に遺構の密度は希薄であるが、調査区のほぼ全面に分布している。

25基検出した土坑は、その平面形をみると楕円形もしくは長方形の土坑(1・2・4~6・9~13・17・23~25号)、円形の土坑(7・8号)、不整形の土坑(3・14~16・18~22号)に分けられるが、これら土坑からの土器の出土はなかった。

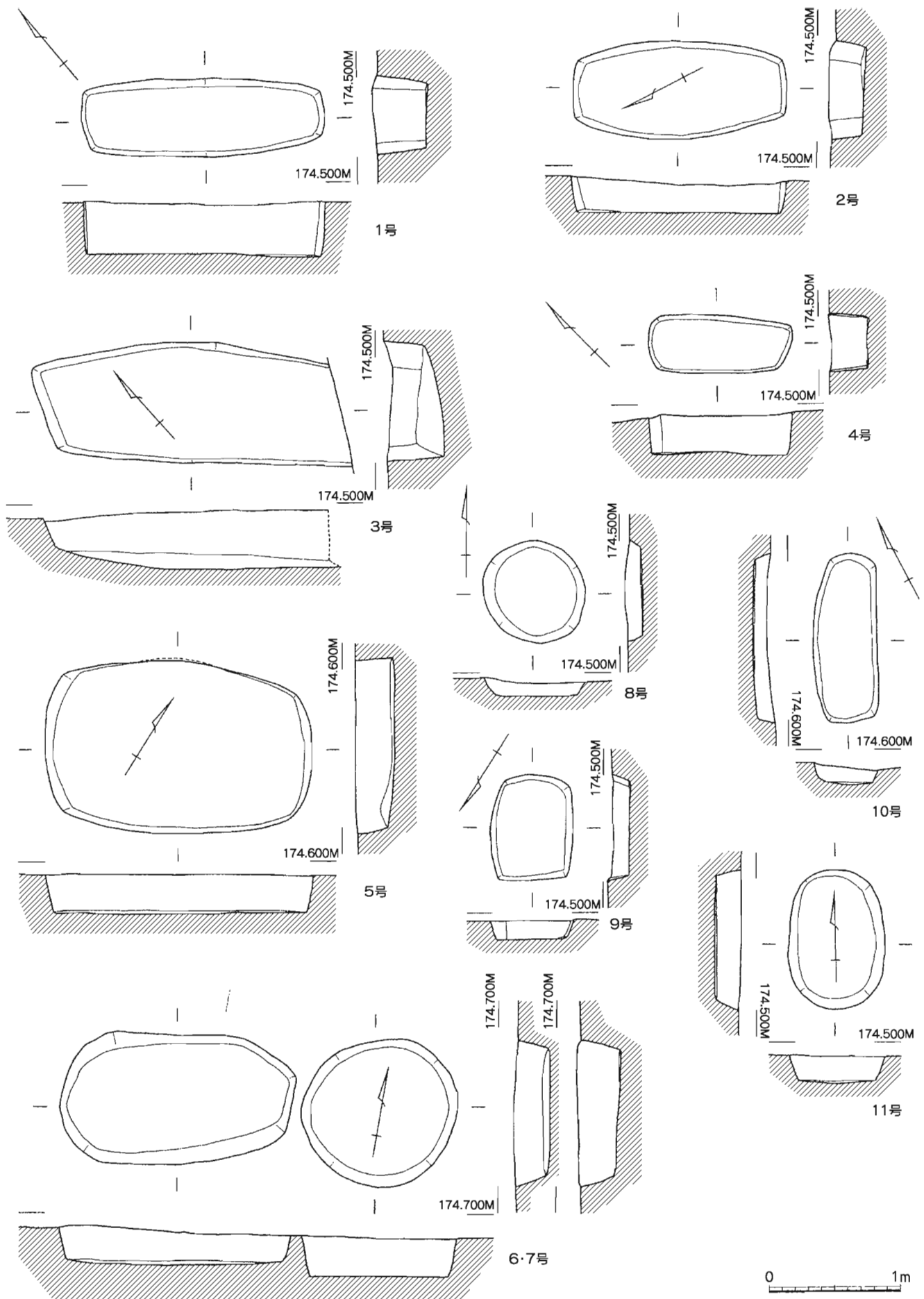
また、ピットも数が少なく、また遺物の出土も見られず、柱穴というよりも木根痕と考えられるものも散見される。

### 土坑 (第25~27図、図版6)

1号は調査区隅で検出した。3号は大型で、その一部を検出した。4号は小型であるが、深さは深い。5号はやや大型の土坑である。6・7号は近接する。8~11号は規模が比較的小型で、深さも浅い。12号からは焼けた礫1点が出土した。14~16号は切り合い関係にあり、16号が14・15号に切られる。17号は深さが浅い。18・19号も切り合い関係にあり、18号が19号を切る。20号は深さが浅い。21号は小型であるが、深さは深い。22号は大型で、埋土内からは礫5点が出土し、その内1点は焼けていた。23号も埋土中より礫4点が出土しており、その内3点は焼けていた。24・25号は小型であるが、深さは深い。

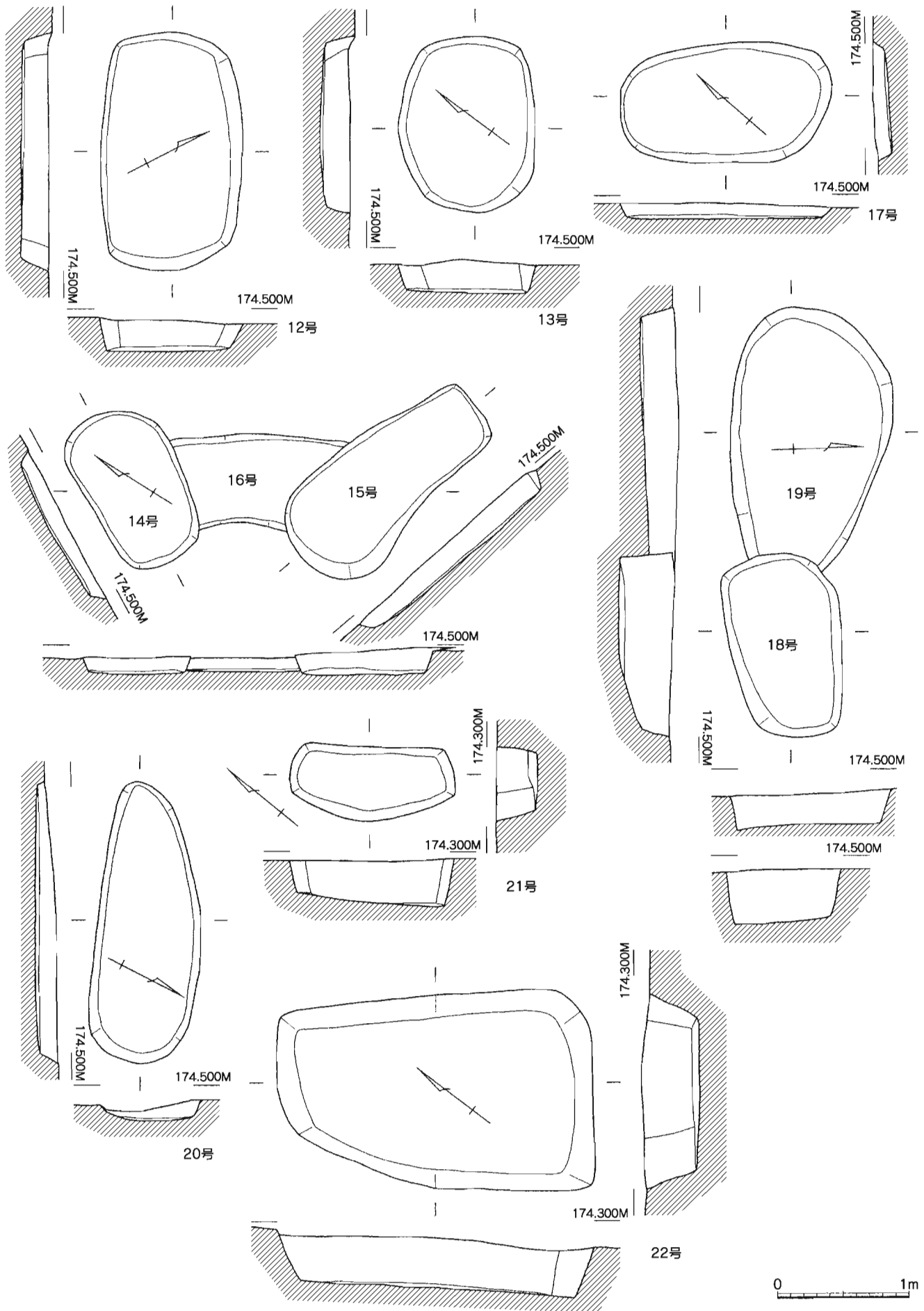


第24図 E区遺構配置図 (1/400)

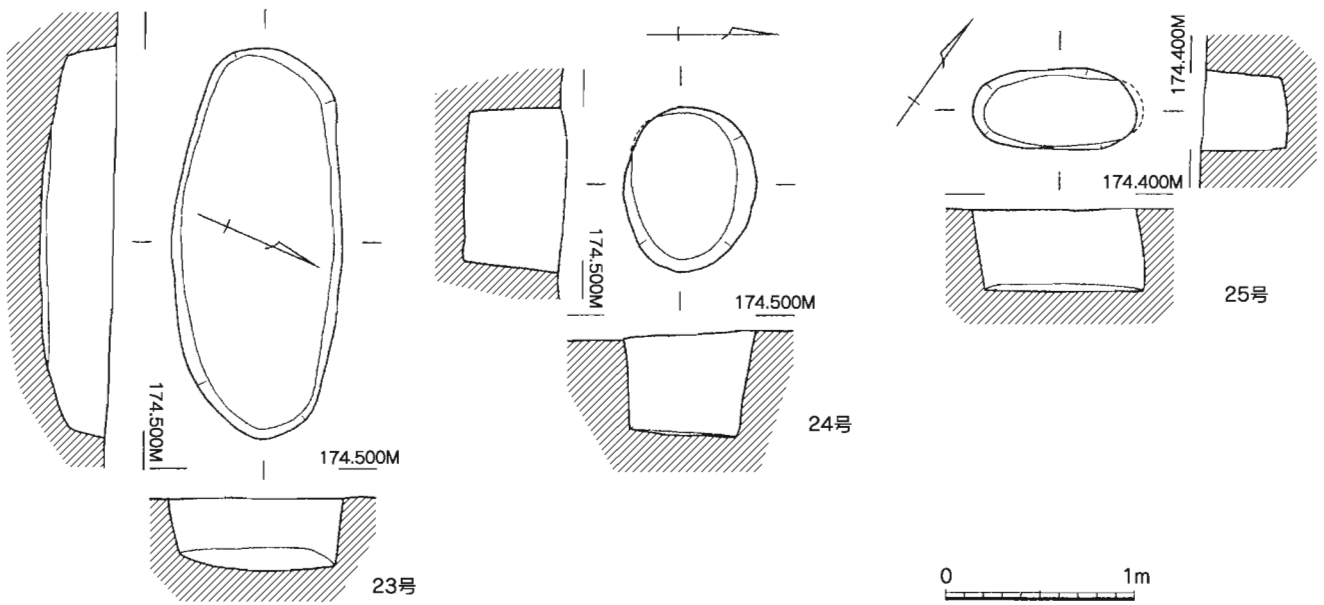


第25图 E区土坑实测图① (1/40)





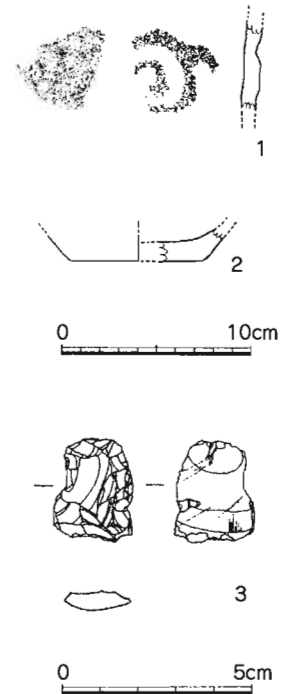
第26图 E区土坑实测图② (1/40)



第27図 E区土坑実測図③ (1/40)

(7) その他の遺物 (第28図)

各調査区から表採された遺物のうち、いくつかをまとめる。第28図の1は深鉢の胴部である。部分的ではっきりしないが凹線によって時計と逆方向の渦文が施文されている。D-2区1号竪穴住居の埋土中から出土。2は深鉢の底部であろう。A区表採品である。3は二次加工剥片である。縦長剥片を素材とし、ネガ面のほぼ全周にわたってポジ面側から加工が施されている。黒曜石製。C区表採品。



第28図 その他の出土遺物実測図(1/4・1/2)

#### IV. まとめ

今回の調査では5ヶ所の調査区において竪穴住居3軒、掘立柱建物1棟、土坑70、ピット555の遺構が発掘され、これらの遺構は出土遺物から縄文時代と古墳時代に属する。

まず、縄文時代の遺構についてはA区4・5・8・13・14号土坑、ピット2・7、B区1号土坑が該当し、遺物の量こそ少ないがそれぞれ縄文土器が出土している。これらの遺構の年代は御領期以降にあたる深鉢の特徴から後期後葉から晩期初頭の時期に位置付けられると考えられる。このほか、A・B区には遺物こそ出土していないが、遺構埋土が類似している土坑やピットが見受けられ、こうした土坑なども同時期の所産と考えられよう。さらに、一括品ではあるが阿高系土器も散見され、中期の遺構が存在する可能性もある。この遺跡では隣接するI区において三万田式土器が出土した竪穴住居1基が調査されており、また西有田赤ハゲ遺跡<sup>(註1)</sup>では縄文時代後・晩期の包含層が確認されるなど、周辺には当該期の遺跡が広範囲に広がっているようである。

次に古墳時代の遺構にはC区とD区の1号住が該当する。両住居から出土した遺物は破片資料が多く年代の決め手に欠くが、D-2区1号住では第20図1の須恵器坏身が口径11.2cmを測り、回転ヘラ削り技法を有する特徴から小田編年のIVbに該当し、またC区1号住については第14図1の須恵器坏蓋の特徴から先のD区1号住と同時期あるいは後出する時期と考えられる。これらのことから両竪穴住居の年代は概ね6世紀末から7世紀前半頃の年代と推定されよう。さて、この遺跡では第2図のV区やVII区において当該期の遺構や遺物が確認されており、集落が台地上に展開することは間違いなさそうで、概して台地の東側や南側に分布する傾向にある。さらに、台地東側の小谷を挟んだJ区においては6世紀代の竪穴住居や土坑で構成される集落が小谷を見下ろす緩やかな場所に営まれている<sup>(註3)</sup>。葛ヶ原台地の西側が急な崖面下には花月川が流れていることから水田を主とする生産基盤には乏しく、台地東の谷部が水田として利用されたものと推定され、その周辺の台地や山の斜面部に集落が営まれたものと理解される。こうした集落に隣接して、今回のC・D区のすぐ北側には葛原古墳が存在しており、この古墳との関係も注目される。

註1) 行時 志郎編 『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第7集 日田市教育委員会 1992年

註2) 小田 富士雄 「九州の須恵器」『世界陶磁全集2 日本古代』小学館 1979年

註3) 渡邊 隆行編 『葛原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第39集 日田市教育委員会 2002年

発掘調査も押し詰まった秋頃、D-2区の竪穴住居の発掘中にニッカウキスキー株式会社の社員の方が現場を訪れ、竪穴住居の復元を提案された。それは観光工場として敷地内に竪穴住居を復元整備し、観光客に見せたいとのことであった。発掘調査後には復元設計のために長野県の養命酒工場内の竪穴住居などを会社独自で調査し工事費約500万円をかけて完成した。(図版7参照。なお、整備にあたっては消防法などの規制がかかり、設計変更を余儀なくされたと聞いた。)企業側の発想で復元住居の整備された工場には、閉鎖までの10年間に約20万人の観光客が訪れ、多くの方に見ていただいた。このことが、その後の日田市の埋蔵文化財の普及・啓発に大きく貢献したことを最後に記しておく。

第1表 竪穴住居観察表

挿図番号	区名	遺構名	平面形	規模				内部構造				備考
				長軸長	短軸長	深さ	床面積	主柱穴数	カマド位置	屋内土坑	ベッドの有無	
第11図	C区	1号住	方形?	617cm	437cm+α	25	22.23㎡	2+α	北向き	-	無	
第13図	C区	2号住	?	170cm+α	143cm+α	7	-	-	-	-	-	
第19図	D-2区	1号住	方形	689cm	641cm	27	38.64㎡	4	北向き	2	無	

第2表 掘立柱建物観察表

挿図番号	区名	遺構名	規模	長軸長	短軸長	柱の深さ	床面積	備考
第16図	C区	1号掘立柱建物	2×2(総柱)	285~303cm	289~290cm	38~59cm	8.69㎡	

第3表 土坑観察表

挿図番号	区名	遺構名	形状	規模			土層	出土遺物	備考
				長軸長	短軸長	深さ			
第4図-1	A区	1号土坑	楕円形	(72)	(65)	(17)	暗茶褐色土	なし	
第4図-2	A区	2号土坑	長方形	175	68	20	暗茶褐色土	なし	
第4図-3	A区	3号土坑	-	(120)	(65)	(20)	暗茶褐色土	なし	
第4図-4	A区	4号土坑	楕円形	316	106	42		縄文土器	
第4図-5	A区	5号土坑	不整形	125	81	22	暗茶褐色土+黄色ブロック	縄文土器、打製石斧	
第4図-6	A区	6号土坑	楕円形	94	64	10	暗黄褐色土	なし	7号土坑より新しい
第4図-7	A区	7号土坑	長方形	243	122	14		なし	
第4図-8	A区	8号土坑	円形	90	91	14		縄文土器	
第4図-9	A区	9号土坑	長方形	246	72	18	黒茶褐色土	なし	
第4図-10	A区	10号土坑	円形	70	70	26	暗茶褐色土	なし	
第4図-11	A区	11号土坑	不整形	103	61	20	暗茶褐色土	なし	
第5図-12	A区	12号土坑	円形	80	70	30	暗茶褐色土	なし	
第5図-13	A区	13号土坑	楕円形	149	103	37	赤褐色土	縄文土器	
第5図-14	A区	14号土坑	不整形	215	104	39	暗茶褐色土+黄色ブロック	縄文土器、打製石斧	
第5図-15	A区	15号土坑	-	(105)	(60)	(37)	暗茶褐色土	縄文土器	
第5図-16	A区	16号土坑	-	(70)	(75)	(37)	暗赤褐色土	なし	
第5図-17	A区	17号土坑	楕円形	189	114	31	暗茶褐色土+黄色ブロック	なし	
第8図-1	B区	1号土坑	不整形	135	81	30		縄文土器	
第8図-2	B区	2号土坑	不整形	146	120	18		なし	
第8図-3	B区	3号土坑	不整形	100	85	20	暗茶褐色土	なし	
第8図-4	B区	4号土坑	長方形	106	60	28		なし	
第8図-5	B区	5号土坑	長方形	130	62	19	茶褐色土	なし	
第8図-6	B区	6号土坑	円形	86	74	22	茶褐色土	なし	
第9図-7	B区	7号土坑	不整形	98	59	25	暗茶褐色土	なし	
第9図-8	B区	8号土坑	不整形	115	68	13	暗茶褐色土	なし	
第9図-9	B区	9号土坑	円形	66	64	23	暗茶褐色土	なし	
第9図-10	B区	10号土坑	不整形	68	65	31	茶褐色土	なし	
第9図-11	B区	11号土坑	円形	83	77	20	茶褐色土	なし	
第9図-12	B区	12号土坑	不整形	115	44	10	暗茶褐色土	なし	
第9図-13	B区	13号土坑	不整形	80	40	14	暗茶褐色土	なし	
第22図-1	D-1区	1号土坑	楕円形	115	99	56	暗茶褐色土	なし	
第22図-2	D-1区	2号土坑	円形	100	90	6	茶褐色土	なし	
第22図-3	D-1区	3号土坑	楕円形	118	69	35	茶褐色土	なし	
第22図-4	D-1区	4号土坑	不整形	213	172	12	暗黄褐色土	なし	
第22図-5	D-1区	5号土坑	楕円形	81	63	33	暗茶褐色土	なし	
第22図-6	D-1区	6号土坑	不整形	175	116	46	暗赤褐色土	なし	
第22図-7	D-1区	7号土坑	長方形	86	61	54	暗茶褐色土	なし	
第22図-8	D-1区	8号土坑	長方形	217	136	16	黒褐色土	なし	
第22図-9	D-1区	9号土坑	不整形	154	104	41		なし	10号土坑より新しい
第22図-10	D-1区	10号土坑	不整形	(192)	(190)	(53)		土器	
第23図-11	D-1区	11号土坑	不整形	90	85	53	暗茶褐色土	なし	12号土坑より新しい
第23図-12	D-1区	12号土坑	楕円形	(178)	122	40	茶褐色土	なし	
第23図-13	D-1区	13号土坑	長方形	95	54	15	暗茶褐色土	なし	
第23図-14	D-1区	14号土坑	長方形	96	55	30	暗茶褐色土	なし	
第23図-15	D-1区	15号土坑	円形	86	86	45	暗茶褐色土	なし	
第25図-1	E区	1号土坑	長方形	184	59	41	茶褐色土	なし	
第25図-2	E区	2号土坑	長方形	163	74	38	茶褐色土	なし	

第25図-3	E区	3号土坑	不整形	(228)	(90)	(43)	茶褐色土	なし	
第25図-4	E区	4号土坑	不整形	109	45	31	茶褐色土	なし	
第25図-5	E区	5号土坑	長方形	203	131	28	暗茶褐色土	なし	
第25図-6	E区	6号土坑	楕円形	175	100	28	暗茶褐色土	なし	
第25図-7	E区	7号土坑	円形	120	110	30	茶褐色土	なし	
第25図-8	E区	8号土坑	円形	77	75	14	暗茶褐色土	なし	
第25図-9	E区	9号土坑	長方形	79	63	14	暗茶褐色土	なし	
第25図-10	E区	10号土坑	長方形	129	47	12	暗茶褐色土	なし	
第25図-11	E区	11号土坑	楕円形	106	73	20	暗黄褐色土	なし	
第26図-12	E区	12号土坑	長方形	180	108	21	暗茶褐色土	なし	焼けた礫1点出土
第26図-13	E区	13号土坑	楕円形	132	104	22	暗茶褐色土	なし	
第26図-14	E区	14号土坑	不整形	125	75	13	暗黄褐色土	なし	16号土坑より新しい
第26図-15	E区	15号土坑	不整形	175	85	20	暗茶褐色土	なし	16号土坑より新しい
第26図-16	E区	16号土坑	不整形	(132)	(70)	(10)	暗茶褐色土	なし	
第26図-17	E区	17号土坑	楕円形	160	91	13	茶褐色土	なし	
第26図-18	E区	18号土坑	不整形	141	85	42	暗茶褐色土	なし	19号土坑より新しい
第26図-19	E区	19号土坑	不整形	(184)	(121)	(38)	茶褐色土	なし	
第26図-20	E区	20号土坑	不整形	212	80	17	暗茶褐色土	なし	
第26図-21	E区	21号土坑	不整形	125	75	35	茶褐色土	なし	
第26図-22	E区	22号土坑	不整形	240	151	49	暗黄褐色土	なし	礫5点出土(うち、焼けた礫1点)
第27図-23	E区	23号土坑	楕円形	205	90	39	茶褐色土	なし	礫4点出土(うち、焼けた礫3点)
第27図-24	E区	24号土坑	楕円形	87	70	55	黒褐色土	なし	
第27図-25	E区	25号土坑	楕円形	86	42	44		なし	

法量の単位はcm。 () 書きは、残存を表す。土層は、一層のみの場合を記載している。

第4表 出土土器観察表

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第6図-1	A区	5号土坑	縄文	深鉢	-	-	-	(4.6)	ナデ?	ナデ?	ABCH	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第6図-2	A区	14号土坑	縄文	深鉢	-	-	-	(2.7)	不明	不明	ABCEH	良	暗茶色	暗茶色	
第6図-3	A区	15号土坑	縄文	浅鉢	-	-	-	(2.5)	ナデ	ナデ	ABH	良	茶褐色	茶褐色	
第6図-4	A区	ピット2	縄文	深鉢	-	-	-	(4.5)	ナデ	不明	ABCH	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第6図-5	A区	ピット2	縄文	深鉢	-	-	-	(6.1)	ナデ?	ナデ?	ABCH	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第6図-6	A区	ピット2	縄文	浅鉢	-	-	-	(3.0)	ナデ?	ナデ?	ABCH	良	茶褐色	茶褐色	
第6図-7	A区	ピット7	縄文	浅鉢	-	-	-	(1.5)	不明	不明	ABEH	良	明茶色	明茶色	
第6図-8	A区	ピット7	縄文	深鉢	-	-	-	(2.0)	不明	不明	ABCEH	良	明茶色	明茶色	
第14図-1	C区	1号住居	須恵器	坏蓋	(11.2)	-	-	(2.1)	ハケ後ナデ	回転ナデ	B	良	灰褐色	灰褐色	内面にヘラ記号
第14図-2	C区	1号住居	須恵器	坏蓋	(12.6)	-	-	(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	BEH	良	暗灰色	暗灰色	
第14図-3	C区	1号住居	須恵器	杯身	(12.4)	-	-	(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	BH	良	明灰色	明灰色	
第14図-4	C区	1号住居	土師器	甕	(18.2)	-	-	(3.3)	ナデ	ケズリ	ABCDEH	良	明茶褐色	明茶褐色	
第14図-5	C区	1号住居	土師器	甕	(21.4)	-	-	(3.8)	不明	ケズリ	ABCDEH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第14図-6	C区	1号住居	土師器	甕	(11.8)	(13.7)	-	(11.4)	不明	ケズリ	BDH	良	黄褐色	黄褐色	
第14図-7	C区	1号住居	土師器	甕	(18.2)	-	-	(6.5)	不明	ケズリ	ABCDEH	良	赤褐色	黒褐色	
第14図-8	C区	1号住居	土師器	甕	(18.0)	-	-	(7.0)	不明	ケズリ	ABCDEH	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第14図-9	C区	1号住居	土師器	甕	(28.2)	-	-	(2.5)	ナデ	ケズリ	ABCEH	良	赤茶褐色	黒褐色	
第14図-10	C区	1号住居	土師器	甕	(26.0)	(27.5)	-	(11.3)	不明	ケズリ	ABCH	良	黄褐色	黄褐色	
第14図-11	C区	1号住居	土師器	甕	-	-	(11.0)	(11.0)	ハケ後ナデ	ケズリ	ABCH	良	黄褐色	黄褐色	
第14図-12	C区	1号住居	土師器	甕	-	-	-	-	ケズリ	ケズリ	ABCDEH	良	黄褐色	黄褐色	
第20図-1	D区	1号住居	須恵器	杯身	(11.2)	-	-	(2.6)	ハケ後ナデ	回転ナデ	BH	良	明灰色	暗灰色	
第20図-2	D区	1号住居	須恵器	埴	(8.8)	-	-	(3.5)	回転ナデ	回転ナデ	H	良	灰色	灰色	
第20図-3	D区	1号住居	土師器	甕	(12.6)	-	-	(5.5)	ナデ	ケズリ	ABCDEH	良	茶褐色	黒茶褐色	
第20図-4	D区	1号住居	土師器	甕	(20.2)	-	-	(7.7)	ナデ	ケズリ	ABCDEH	良	赤褐色	黄褐色	
第20図-5	D区	1号住居	土師器	甕	(27.1)	-	-	(11.5)	ハケ後ナデ	ケズリ	ABCEH	良	赤褐色	赤褐色	
第28図-1	D区	1号住居	縄文	深鉢	-	-	-	(4.6)	ナデ	ナデ	DHI	良	暗赤褐色	暗赤褐色	渦文
第28図-2	A区	表探	縄文	深鉢	-	-	(6.8)	(1.7)	不明	不明	ABCEH	良	赤褐色	黒褐色	

単位はcm。 () は現存長。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第5表 出土石器・鉄器観察表

挿図番号	区名	遺構名	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第15図-1	C区	1号竪穴住居	スクレイパー	安山岩	5.2	3.5	1.25	33.7	
第15図-2	C区	1号竪穴住居	鉄鏃	—	(2.9)	(0.75)	(0.5)	(2.1)	欠損品
第28図-3	C区	表探	二次加工剥片	黒曜石	2.6	2.1	0.55	3.4	



A区調査後



4号土坑



5号土坑



6・7号土坑



8号土坑



14号土坑



17号土坑

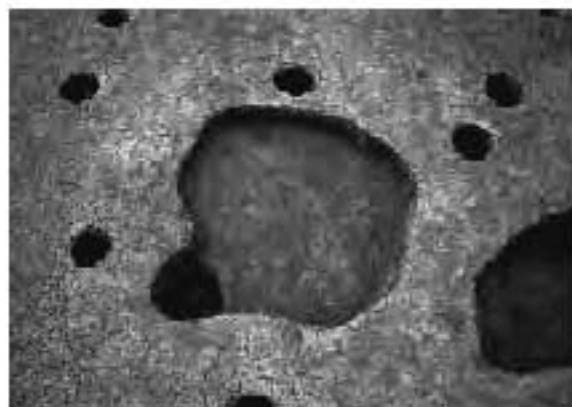


ピット2

写真図版2



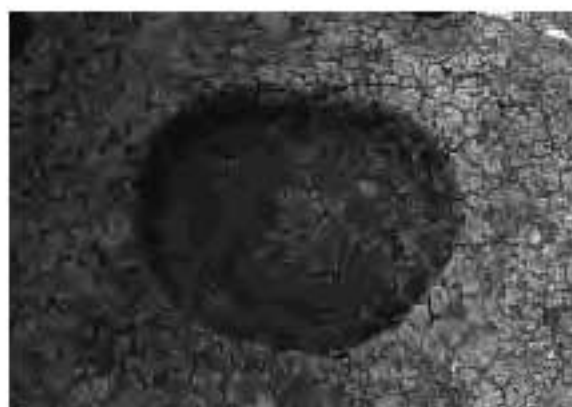
B区調査地



2号土坑



4号土坑



8号土坑



8号土坑



9・10号土坑



11号土坑



12号土坑



C区原状前



C区原状後



1号窟穴住居



1号窟穴住居



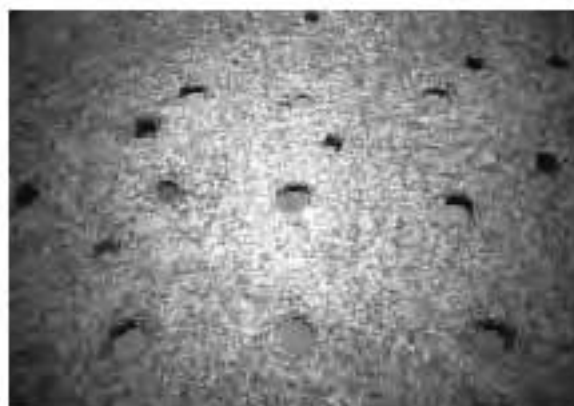
1号窟穴住居



1号窟穴住居



2号窟穴住居



1号掘立柱居管



写真図版4



D-1区調査前



D-1区調査後



D-1区調査前



D-1区調査後



3号土坑



5号土坑



9・10号土坑



13・14号土坑



D-2区開削前



D-2区開削後



1号掘穴住居



1号掘穴住居



1号掘穴住居



1号掘穴住居



1号掘穴住居 カマド



1号掘穴住居 カマド

写真図版6



E区調査前



E区調査後



1号土坑



4号土坑



6・7号土坑



9・10号土坑



12号土坑



14~16号土坑



6-1



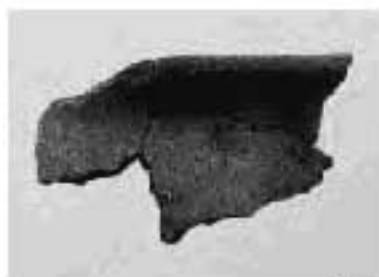
14-6



16-1



6-4



14-7



16-2



6-6



14-8



20-1



14-1



14-10



20-2



14-2



14-11



20-4



14-3



14-12



20-5

写真図版8



工事中の復元住居①



工事中の復元住居②



工事中の復元住居③



工事中の復元住居④



工事中の復元住居⑤



工事中の復元住居⑥



工事中の復元住居⑦



完成した復元住居⑧





温泉全景



現在の元住居

ふりがな	くずばるいせき
書名	葛原遺跡Ⅱ
副書名	A～E区の調査報告
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	53
編著者名	土居和幸
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2004年6月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		所在地	遺跡番号					
葛原遺跡	大分県日田市 大字西有田 字葛原	44204-6	651057	33°21'05"	130°57'28"	19870525 ～19871104	4,002㎡	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葛原遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代	竪穴住居跡3軒、 掘立柱建物1棟、 土坑70基、ピット555	縄文土器、石器 土師器、須恵器、 鉄鏃など	

# 葛原遺跡Ⅱ

2004年6月30日

編集 日田市教育委員会 文化課  
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発行 日田市教育委員会  
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 山本印刷有限公司  
大分県日田市大日町3986-3